いわ　あな　びら
岩穴平遺跡

稲葉城跡

1981

松江市教育委員会

はじめに

松江市の北東部については、従来あまり埋蔵文化財の調査のなされたことはありませんでしたが、今回、はからずも送電線鉄塔建設に先駆けて発掘調査が実施されたことは、この地域の生活、文化史の解明にいくらかでも役立つことと考えます。

岩穴平遺跡では窯跡の一部を検出し、大井地区に特徴的な須恵器生産遺跡の実態の解明に一歩近づいたものといえます。又、稲葉城跡は、近年急速に進行しつつある中世城郭の研究に参考となるでありましょう。

発掘調査の実施に際して、関係各位の多大な御協力を得たことについて、記して感謝の意を表する次第であります。最後に、本書を読まれた方が一人でも多く埋蔵文化財に対する理解と愛護の心を抱かれることを願ってやみません。

昭和５６年３月

松江市教育委員会

教育長　内　田　　榮

凡　　例

1. 本書は中国電力株式会社松江支店が、松江市大井町及び西尾町地内において計画した送電線、菅田線一部新設工事の鉄塔部分に所在する岩穴平遺跡と稲葉城跡について、松江市教育委員会が実施した発掘調査の報告である。

2. 発掘調査事業の組織は下記のとおりである。

委託者	中国電力株式会社松江支店		支店長　米田節次郎
受託者	松江市	松江市長	中村芳二郎
主体者	松江市教育委員会	教育長	内田　榮
事務局	松江市教育委員会社会教育課		
総　括	同	上	課長　石飛　進
庶務会計	同	上	文化係長　足立千利（昭和５５年１０月まで）
	同	上	文化係長　中西宏次（昭和５５年１１月から）
	同	上	文化係主事　加藤　睦
担当者	同	上	文化係主事　岡崎雄二郎
補助員	同	上	文化係指導員　佐々木稔

3. 作業にあたっては下記の方々の協力を得た。（敬称略）
野津文子、野津林子、野津キワ子、野津美江子、野津美恵子、中倉行彦、清山由浩、米沢哲郎、福原直樹、米沢　透。

4. 土地所有者他関係者との地元折衝にあたっては、事業者である中国電力株式会社松江支店の用地担当、世良啓明、野津勉、両氏の御援助を願った。記して感謝の意を表する次第である。

5. 本書の編集は主として岡崎と佐々木が行なった。

6. 図面の浄書にあたっては、文化係主事中尾秀信君の手を煩わした。

7. 陶磁器片の考察については島根県立博物館学芸員村上勇氏から有益な御教示を得た。記して感謝の意を表する次第である。

目　　次

Ⅰ　発掘調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ　岩穴平遺跡 …… 3

1.　遺跡周辺の歴史的環境 …… 3

2.　調査の概要 …… 5

3.　小　　結 …… 15

Ⅲ　稲葉城跡 …… 25

1.　遺跡周辺の歴史的環境 …… 25

2.　調査の方法 …… 26

3.　遺　　構 …… 31

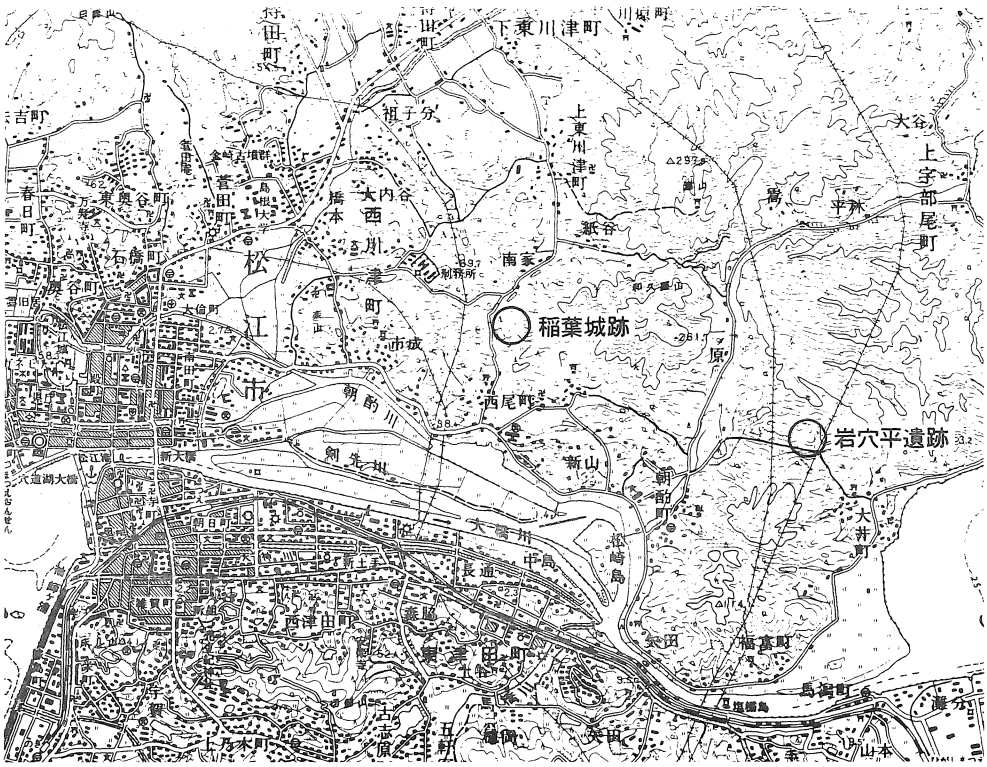
4.　遺　　物 …… 33

5.　小　　結 …… 37

Ⅰ　発掘調査に至る経緯

中国電力株式会社では、電力需要の増大に対応するために、送電線の新設強化を急ぐことになった。そこで、松江市大井町から西尾町にかけて約３㎞の区間に送電線を設けることになった。鉄塔の設置箇所は山の尾根の斜面がほとんどであることから、松江市教育委員会に対して埋蔵文化財の分布調査の依頼があった。そこで早速、分布調査を実施したところ、№１地点と№１０地点において埋蔵文化財包蔵地の該当することが判明した。すなわち、№１地点付近では、斜面裾の畑において須恵器のおびただしい散布が認められたので、付近一帯に須恵器窯の分布が想定された。又、№１０地点では、尾根上で長さ９０ｍにわたって人為的に削平加工した平坦地があり、地元の伝承では城跡といわれている地点であることがわかった。

そこで、岩穴平遺跡と呼称した№１地点については発掘調査を実施してみることとし、稲葉城遺跡と呼称した№１０地点については鉄塔部分を城跡の外側、つまり、山の裾に変更出来ないかどうか協議したが、中電側としては、線型と高さの点から地点の変更は不可能で



第１図　発掘調査地点位置図

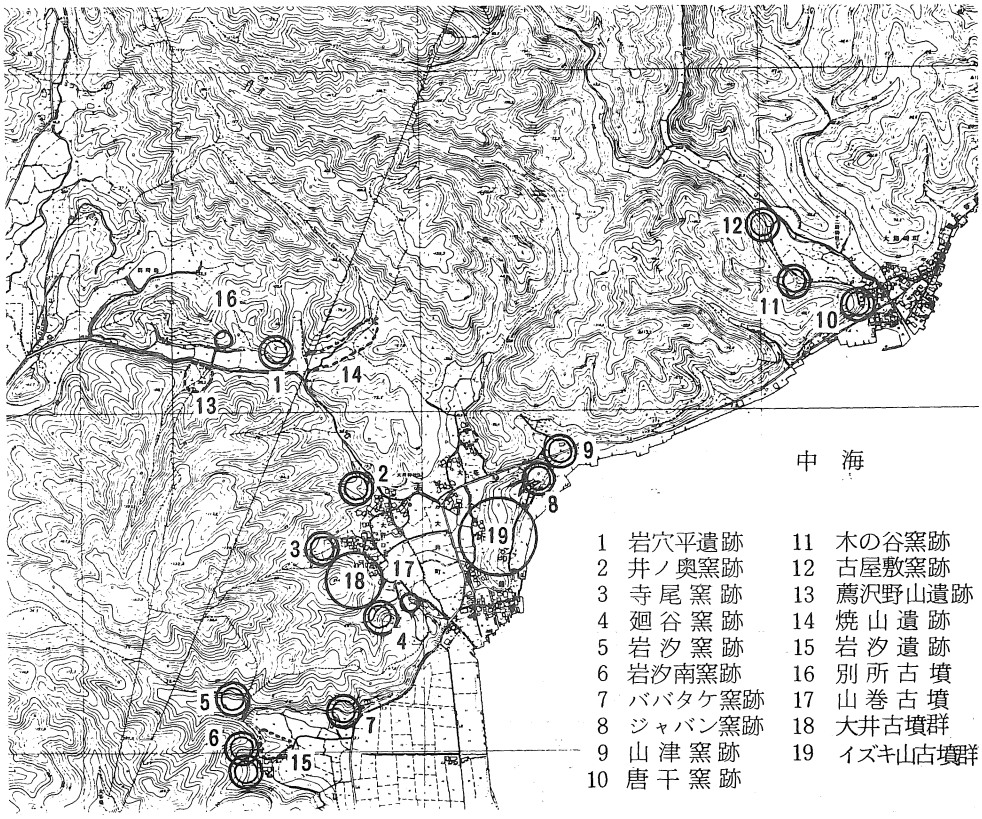
あるとし、事前の発掘調査をお願いしたいということであった。 当市教育委員会としては、発掘調査も止むを得ないとの判断から、昭和５５年７月４日、中電側と委託契約を交わしたのち、昭和５５年７月２８日から同年９月４日までの計３０日を費やして発掘調査を実施した。その内、№１地点は８月１８日まで行ない、ひき続き№１０地点は８月１９日から実施した。

岩穴平遺跡

Ⅱ　岩穴平遺跡について

1.　遺跡周辺の歴史的環境

本遺跡は市街地中心から東へ約６㎞ほどの山林裾斜面に立地する。その所在地籍は松江市大井町字岩穴平1040－２番地である。東西に深く入り込んだ細長い谷間水田となっており、水田地には点々と須恵器の散布が認められる。谷間水田の中ほどの北側山林斜面には別所古墳（第２図16）が所在し、石棺式石室が開口して若干の墳丘盛土が遺存する。石棺式石室は、出雲地方に特有の石室形態で、朝酌地区一帯には岩屋（いわや）古墳、上（かみ）神社跡古墳、廻原（めぐりはら）古墳群[注1]など集中して分布していることが注目されている。遺跡の対岸、すなわち、南側の山裾畑一帯には薦沢野（こもさわの）山遺跡（第２図13）があり、須恵器片の散布が認められ、以前、市道の拡張工事で採土した際に陶馬が発見されている。又、この谷間水田の東方最奥部の畑地や茶園にも多数の須恵器片の散布が認められ、「焼山（やけやま）遺跡（第２図14）」と呼んでおり、幅４０～６０ｍ、奥行150ｍ位の広い平坦地があるので、恐らくは大集落跡があったところであろう。



第２図　周辺の遺跡分布図

ところで、今回の調査地は、水田面から約１０～１４ｍほど高い山裾斜面である。水田の際の崖面は２ケ所にわたり長雨のために土砂崩れしているが、その崖面を観察すると、いずれも黒褐色土層中に炭化物や須恵器片を包含している。又、その上の畑地には、須恵器片が大量に散布している。これらのことから、この斜面一帯に大規模な須恵器窯跡の存在が推定された。この谷間水田の東南の峠を越えると大井の集落である。この大井地区には古くから須恵器の窯跡が知られている。すなわち、山津(やまず)窯跡(第2図9)、寺尾窯跡(第2図3)、ババタケ窯跡(第2図7)、岩汐窯跡(第2図5)である。ここでは、西歴６世紀前半頃から須恵器生産が開始されていることが知られている。そして奈良時代には、出雲国風土記(注2)島根郡の条に『…大井の浜。…すなわち陶器をつくれり』とあるように、国府や寺院、官衙向けに大量生産され、最盛期を迎え、平安期の糸切底の段階をもって終息したと考えられている。

第１表　遺跡一覧表

図面番号	名称	所在地	区分	種類	概要
1	岩穴平遺跡	大井町　岩穴平	窯跡		須恵Ⅱ期末～Ⅳ糸切底
2	井ノ奥窯跡	〃　井ノ奥	〃		須恵Ⅲ～Ⅳ期
3	寺尾窯跡	〃　寺尾	〃		〃　Ⅱ～Ⅲ期
4	廻谷窯跡	〃　廻谷	〃		〃　Ⅱ期
5	岩汐窯跡	〃　岩汐	〃		〃　Ⅲ～Ⅳ期
6	岩汐南窯跡	〃　〃	〃		〃　Ⅳ期
7	ババタケ窯跡	〃　ババタケ	〃		〃　Ⅳ期
8	ジャバン窯跡	〃　ジャバン	〃		〃　Ⅲ期
9	山津窯跡	〃　山津	〃		〃　Ⅲ期
10	唐干窯跡	大海崎町　唐干	〃		
11	木ノ谷窯跡	〃　木ノ谷	〃		
12	古屋敷窯跡	〃　古屋敷	〃		
13	薦沢野山遺跡	大井町 薦沢野山	遺物散布地		集落の可能性あり、陶馬、須恵器片
14	焼山遺跡	〃　焼山	〃		須恵器片多数
15	岩汐遺跡	〃　岩汐	〃		須恵器、土師器片多数
16	別所古墳	〃　別所	古墳	墳形規模不明	石棺式石室の奥半分残存
17	山巻古墳	〃　山巻	〃		箱式石棺、大量の須恵器・蓋坏副葬
18	大井古墳群	〃	古墳群		
19	イズキ山古墳群	〃	〃		

2. 調査の概要

鉄塔敷地の上段部については、試し掘りした結果、土器などの遺物は包含されていないことがわかったので、下段部について調査を実施することとし、４ｍ間隔のグリッドを東西に６区、南北に３区設定し、東北角のグリッドから西南へそれぞれ１～１８区まで設定した。この内、実際に調査したのは第１区、第５区、第７区、第７Ａ区、第８区、第９区、第１３区、第１６区である。以下、各区の概要を述べる。

第１区　褐色土が２０～４０cm堆積し、その直下は黄褐色軟砂質の地山となっている。地山面において何ら遺構は確認されなかった。

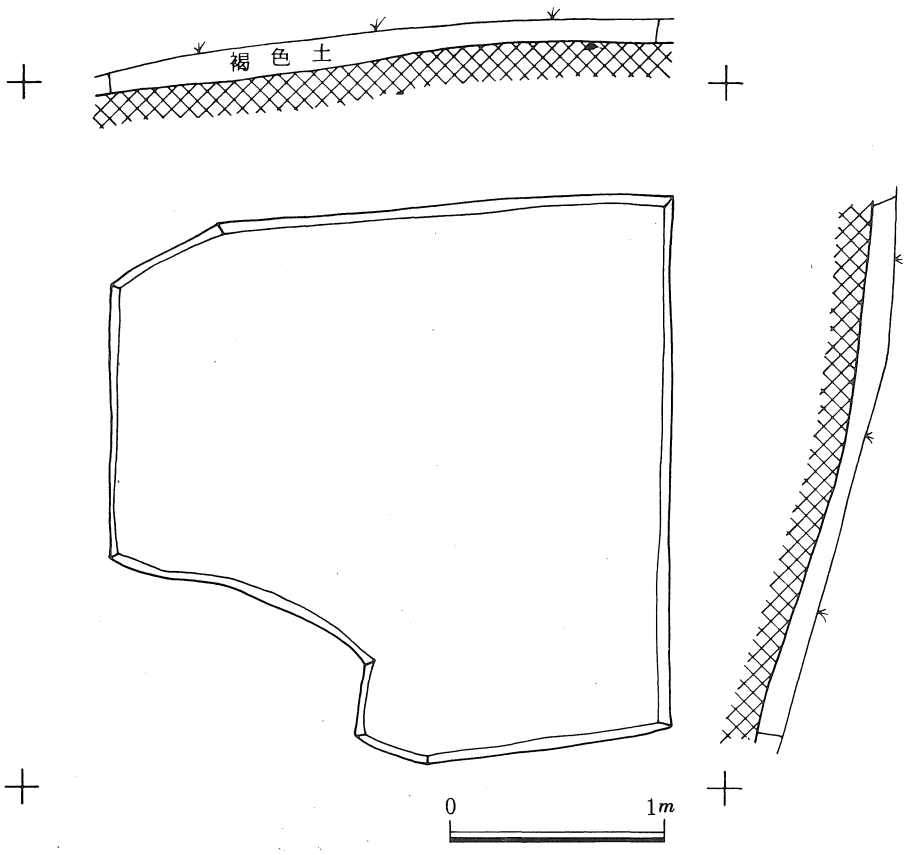
出土遺物は褐色土層から出土したが、畑耕作の折りの攪乱土であることから細片が多い。その器種として確認されるのは須恵器壷や甕の胴部、蓋坏の胴部（山陰Ⅲ期）[注3]、糸切底の坏身破片である。

第５区　褐色土層が１０～１５cm堆積しその下層は地山で明褐色の粘性土となっている。地山面には何ら遺構は見当たらなかった。出土遺物は皆無であった。

第７区　北壁の土層を観察すると地面の下は第１層が褐色土層で厚み２０～４０cm、第２層が明褐色土層で厚み５０～６０cm近くを計る。その下層は５～１５cmと層厚のうすい褐色土となり地山面と接する。西部では炭化物を含む暗褐色土が堆積している。南壁では褐色土層以下の土層がさらに細かく分かれ炭化物を多く含む褐色～黒褐色土層→黄褐色土層→明褐色土層と続き地山面に至る。これらの土層中にはいずれも須恵器片、土師器片を多く含み、焼土や炭も遺存していた。地山面は北壁のところで落差４０cmほどの急な段を形成し、以南ではわずかに傾斜するとしてもほぼ平坦面を保つ。堆積土層の内、第１層は畑地耕作による攪乱土と思われ、第２層も地山の軟砂質土を混じえ一見すると地山面と見まちがうほどであるが、土は軟らかく粗いのでこの土層も後世客土された可能性が強い。

遺構　グリッド東壁際に上端径７０cm、深さ５０cmほどのピットが検出され、しっかりした柱が建っていたと思われるが、このピット内からは土師器甕の破片が出てきた。地山面は北部で４０cmほどの段をつくり、以南は平坦面を維持していることから全体が加工された面であり、７区を掘った段階では柱穴と考え合わせると住居跡のような性格が考えられた。

遺物　特徴的なものを見てみると、第１層出土のものは須恵器甕や坏蓋の体部（山陰Ⅳ期）の破片に混じって明治時代以後の陶器片も混入していた。第２層からは須恵器蓋や甕の体部破片、蓋坏の身の破片（山陰Ⅳ期）が出土した。第４層の暗褐色～黒褐色



第3図　5　区　平　面　図

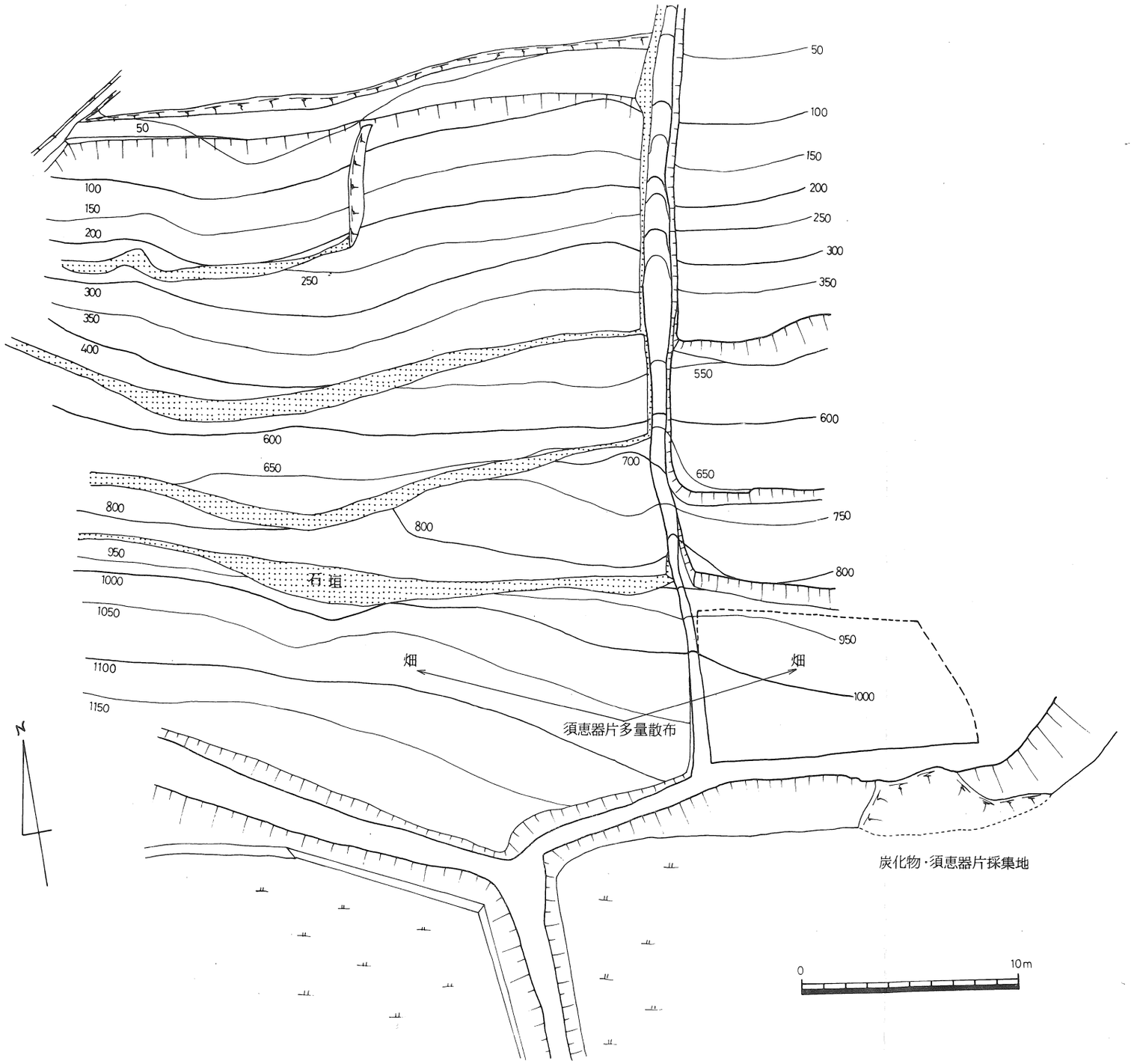
土層中からは奈良期の高台付坏の底部（第6図の7－1）、蓋坏一合（山陰Ⅳ期、第6図の7－2、7－3）、甕胴部破片（山陰Ⅱ期の末頃）が出土した。さらに明褐色土層で地山面に接して山陰Ⅲ期の蓋坏破片や小形壷の口縁、土師器片（第6図7－5）が発見された。

土層と出土遺物の関係をみてみると必らずしも下層の遺物がより上層の遺物より古いというわけではなく、時期の違うものが混在していることが注意される。

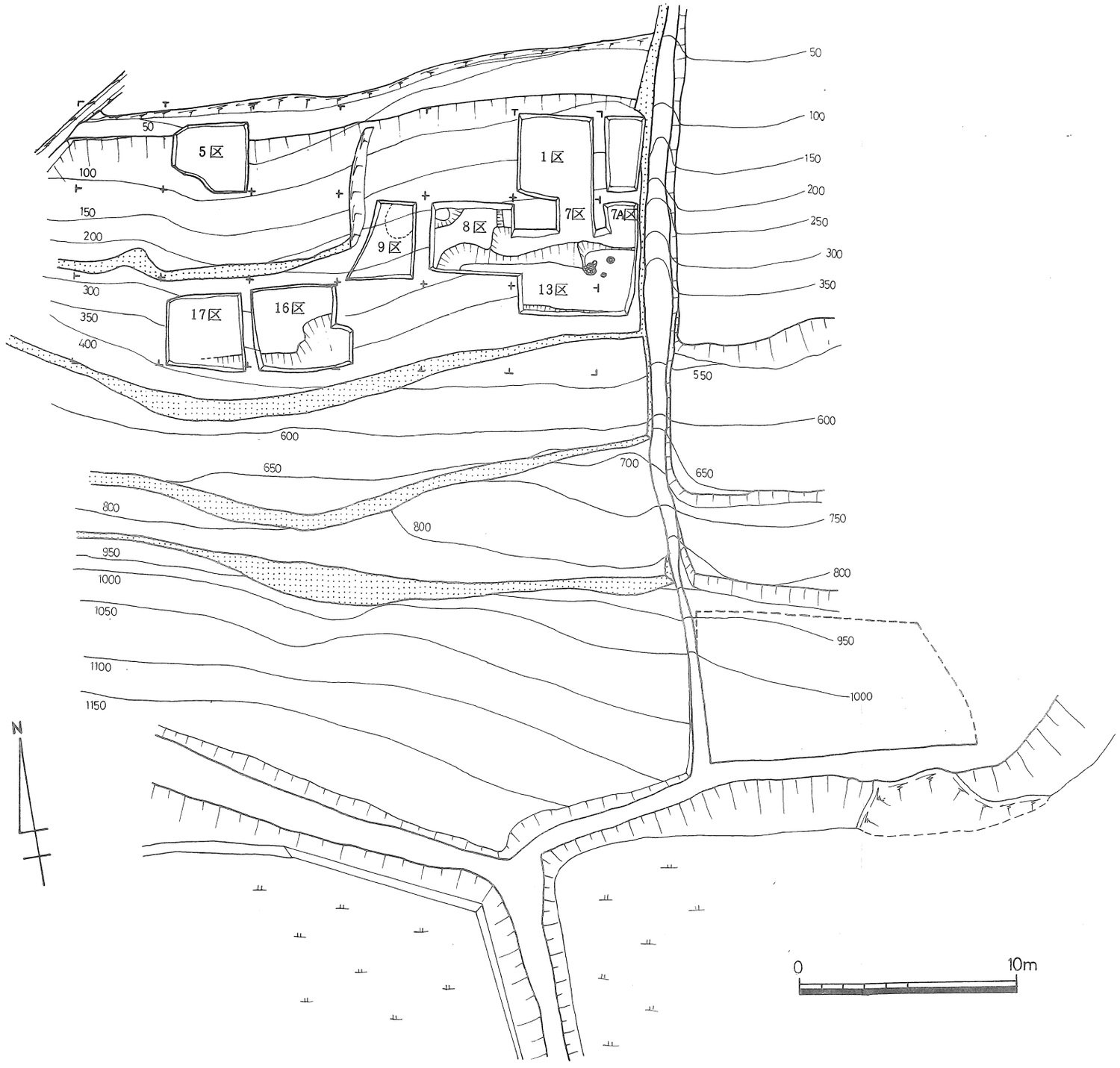
このように7区において遺物包含層が認められたので周辺を拡張して調査することにした。すなわち、7区の東側には7A区（2×4m）、西側には8区（4×4m）、南側には13区（2×4m）を設定した。

第7A区

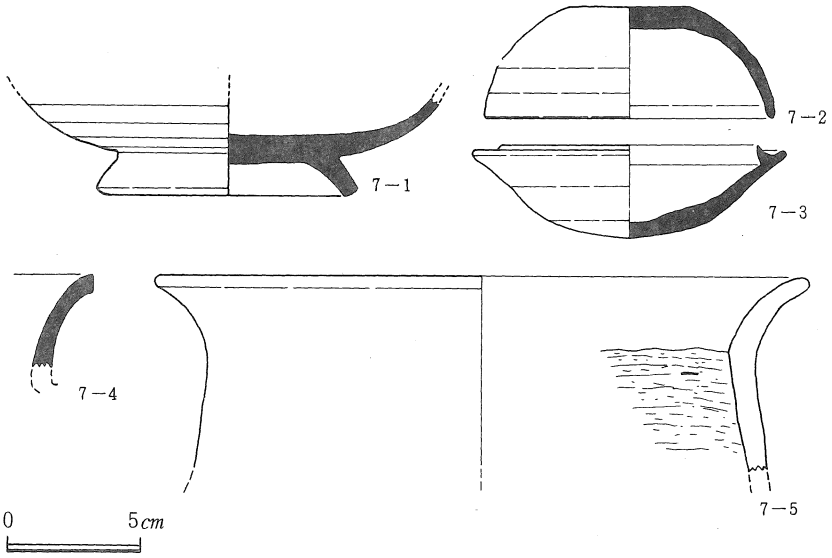
第1層は褐色土で厚み25cm、第2層はやや暗褐色土となり厚み40cm、山陰Ⅲ期前半頃の坏蓋口縁の破片（第7図）や坏身、壷、甕の胴部の破片を多く含む。土器以外では炭化物を少々含む。地山直上の土層は炭化物や焼土を多く含む暗褐色土で層厚20cmを計る。7区で確認した段は東方向へ続いている。段より以南の地山面は平坦でありピットが2個確認されたが、北寄りのピットは深さ4cmほどで柱穴とはなり難い。



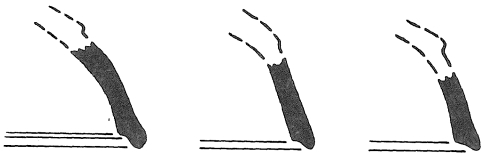
第4図　岩穴平遺跡測量平面図



第5図　岩穴平遺跡発掘調査成果平面図



第６図　７区出土須恵器土師器実測図



第７図　７Ａ区出土須恵器片実測図

第８区

７区で確認された地山平坦面は、西部で消失し段との界線はほぼ直角に南へ折れる。段も同様に南へ折れているが、その落差は次第に増し西側で１ｍ余りとなる。堆積土層も西側段に向けて斜めに上がる傾向にある。表土は褐色土で畑地の耕作による攪乱土である。第２層以下は上下２層の客土と思われる明褐色土層や褐色土層・黄褐色土層が斜めに堆積しているが、いずれも遺物を全く含まない。地山直上の褐色土層中には炭化物を若干まじえるが土器片などは含まれていない。

第９区

グリッド北西部は松の木がたち込めていたので、北側の一辺は２ｍとした。北西部では表土下５cmにして黄色～赤色の地山（軟砂岩）となっているが、その他の部分では厚み約２０cmの褐色砂質土が堆積していた。グリッドの北部においては直径２ｍにわたって浅い落ち込みが認められ厚み５～１０cm、さしわたし３０～５０cmの灰色安山岩が多数重なった状態で埋め込まれていた。この安山岩は、所謂「大海崎（おおみさき）石」と呼ばれ調査地周辺の畑の段に使用されている石垣と同種である。したがってこの落ち込みは石垣を形成するにあたって原石から加工した際の残り屑を埋め込んだものと思われる。出土遺物

は地山直上からわずかに小型の甕か壷の胴部の小片が１片発見されている。

第１３区

７区で確認された地山平坦面は西部ではやや南へ傾斜する傾向にあるが、中央部、東部ではさほどではない。しかし南壁では急激に落ち込んでいる。その深さは確認していないが西壁を観察するに地山上の３つの土層（厚み計４０cmほど）も共に切り崩されており、これら土層の堆積後に何らかの理由で山の斜面が切削されたことが分かる。

その理由として考えられるのはこの１３区の南部には高さ１mほどの石垣が東西方向に長く続いていることから石垣形成時にその背後の部分が切削されたのではないかと考えられる。このことからも西壁で確認された第１層と第２層は石垣形成後の堆積であると推測される。

遺物　第２層以下の土層全てに須恵器片を含む。特に第４層には須恵器片の他に焼土や炭化物を多く含んでいる。地山直上の黄褐色土層中には須恵器の他に土師器も含んでいる。須恵器では炭化物混りの暗褐色土層中からは坏身が２点出土している。

１３－１（第10図）は、口縁径１１cm、底径７cm、器高3.7cmを計る。底外面は糸による切り離しが行なわれ、底内面は斜ナデ、それ以外は横ナデ調整が施されている。

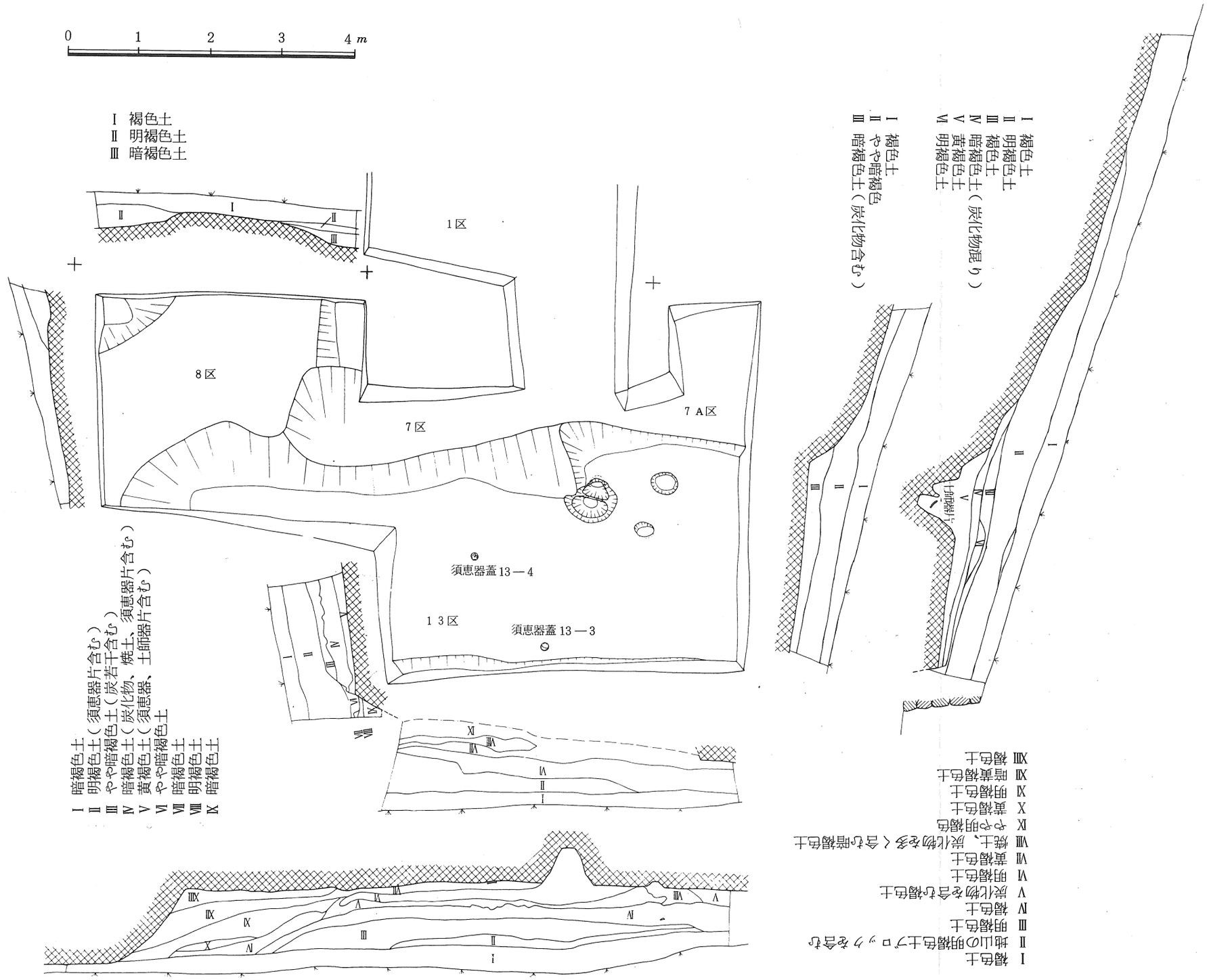
１３－２（第10図）は、口縁径１２cm、底径6.6cm、器高3.3cmを計る。蓋受部の返りの高さが非常に低くなったもので底外面も未調整であり山陰第Ⅳ期のものである。

地山平坦面上に須恵器蓋２点がほぼ完形のまま出土したが、その内一方のものは器高４cm（第10図13－3）、口径10.6cmを計る。上部はさしわたし４cmほどがほぼ平坦面となり未調整である。口縁部はほぼ垂直に下がる。内面に一直線のへら記号を有する。他方の蓋（第10図13－4）は上部に乳頭状で高さ５mmほどのつまみを有し口縁部に身の受け部をつくるものである。器高は2.8cm、口縁径10.8cmを計る。いずれも山陰第Ⅳ期のものである。

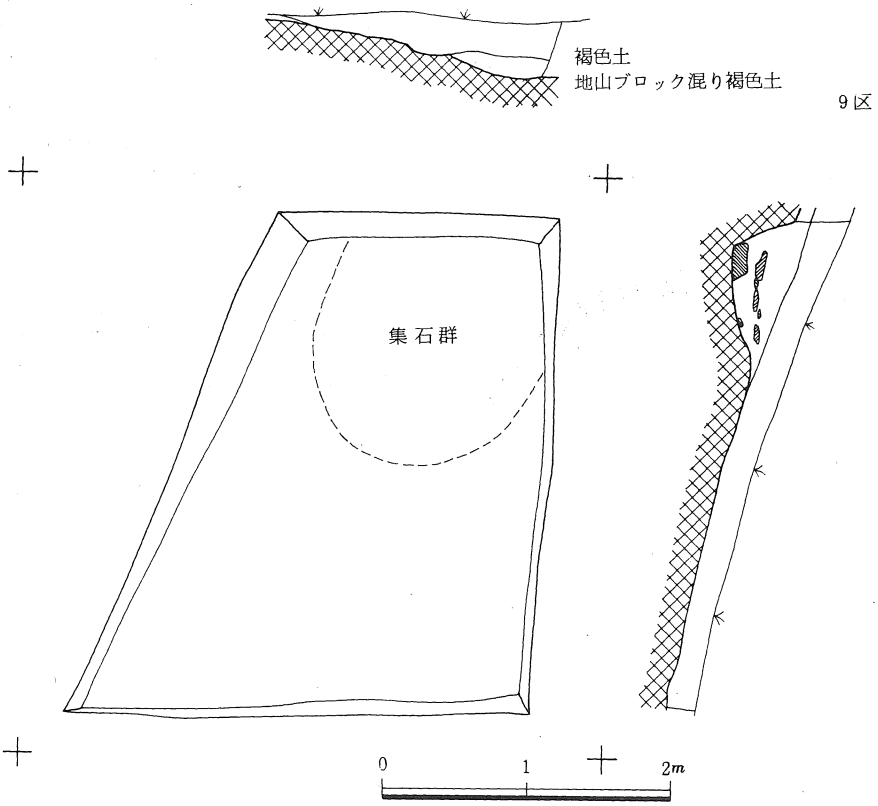
第１６区

２５度ほどの急斜面である。堆積土は北部で褐色土が厚み２０cmほどあるが、南部では４０cmほどありその下層は厚み１５cmほどの暗褐色土となり須恵器片や土師器片を含んでいる。この遺物包含層の直下は黄褐色の地山（軟砂岩）となっているが、南半部において一段と傾斜の度合を増している。表面の褐色土層は、近年まで畑地に利用されていたことから、この遺物包含層はもともと北半部にも存在し地山面も南半部と同じ急角度で北へ延びていたと思われる。地山面には何ら遺構は確認されなかった。

遺物　暗褐色土層の内、とりわけ地山直上から多く出土した。確認出来る器種としては、須恵器甕の胴部（山陰Ⅲ期）、小形壷の口縁胴部（奈良時代）、坏蓋の胴部、長頸壷（頸部の一部を欠く）がある。特に長頸壷は（第12図16－1、16－2）器高推定２１cm、口径１０cm、胴部最



第８図　７、７Ａ、８、１３区調査平面図



第9図　9区調査平面図

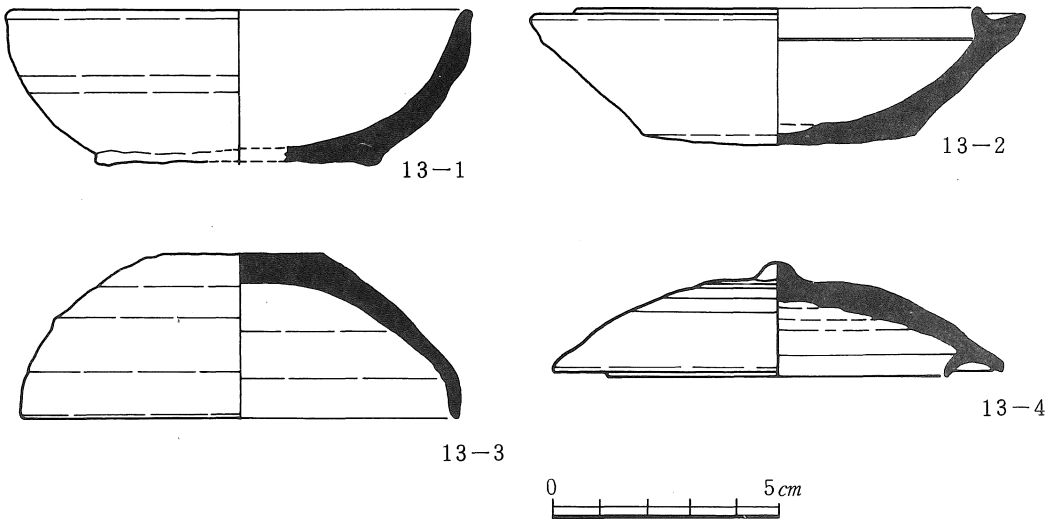
大径１５cm、高台径８cmを計り、底部には糸による切り離しの後、ロクロナデで糸切り痕跡を消去している。頸部には一条の沈線を付ける。出雲国庁跡出土須恵器の分類中、第３型式[注4]に類似し、西暦８世紀代のものと思われる。

第１７区

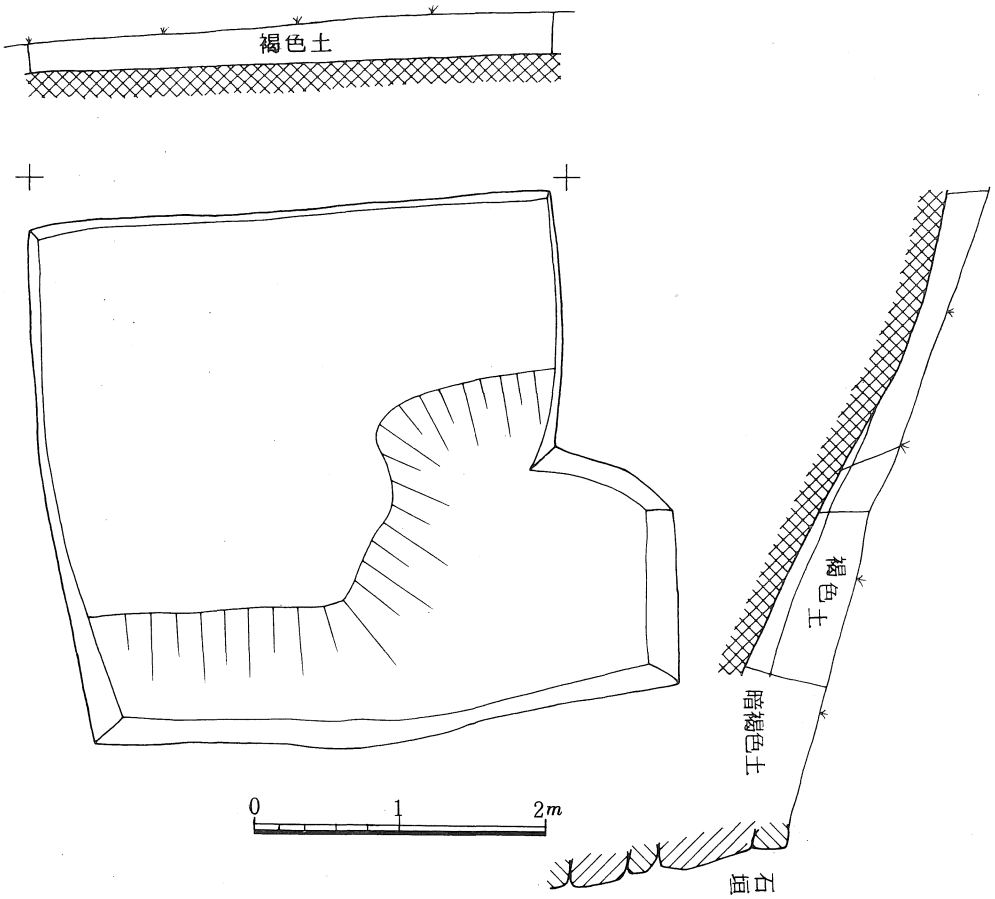
南部において急な段が東西方向へ続いていた。遺物は皆無である。

3. 小　　結

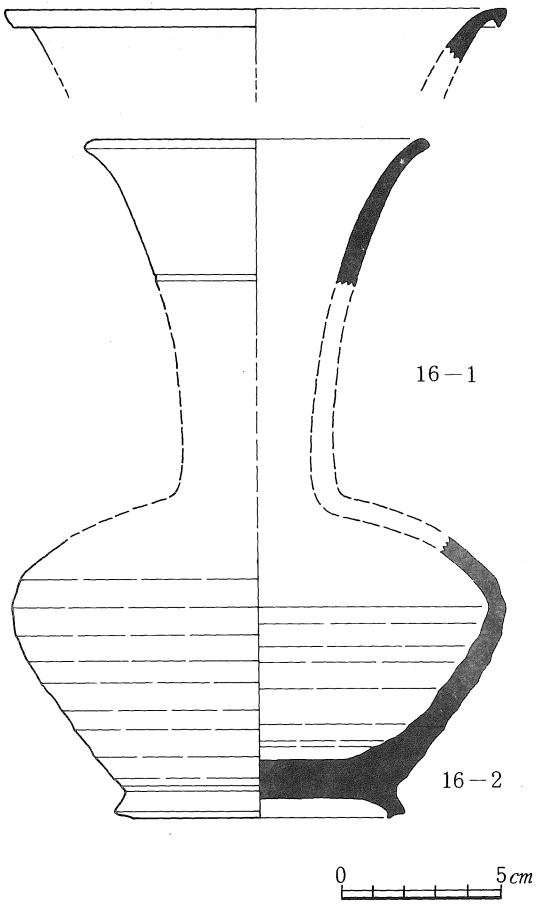
調査区の東部及び斜面の低い部分（南部）において、土器の包含層が認められた。すなわち、１６区においては長頸壷の破片が認められた。その時期はほぼ８世紀頃のものといえる。出土のあり方から、より上方の原位置から急斜面の凹地へ転がり落ち込んだことが考えられる。又、７、７－Ａ区、１３区で東西の長さ2.2ｍほどにわたって、深さ1.2ｍほどの落ち込みが認められ、底面はほぼ水平になっている。この南半部は、石垣による段で、すでに削り取られているが、特に東部においては直径７０cm、深さ５０cmほどの柱穴と思われるピットがあり、住居跡もしくは作業場跡ではないかと推定され



第１０図　１３区出土須恵器実測図



第１１図　１６区調査平面図



第１２図　１６区出土須恵器実測図

る。この平坦面の直上からは、須恵器蓋坏、長頸壷の破片が出土しており、その内２個は完形品であり、この平坦面が形成されてそう遠くない時期に埋まったものと考えられるので、住居跡を含めて平坦面の時期をこれらの須恵器の示す時期としてよいだろう。

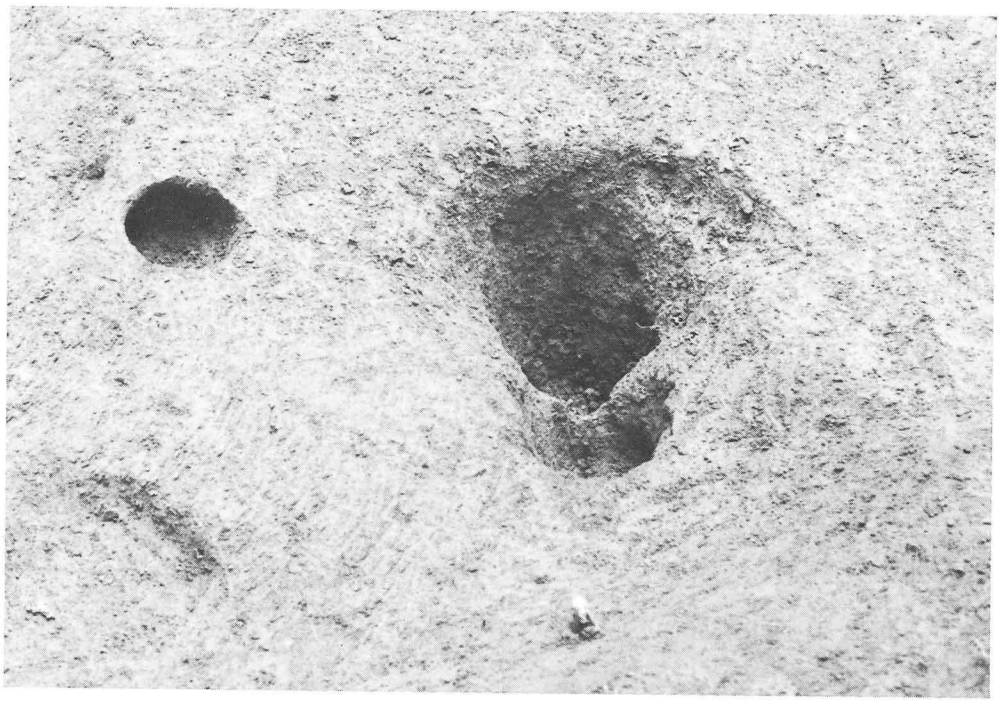
又、平坦面の直上の層に当る暗褐色土層中は、焼土や炭化物、ガラス状溶融固形物にまじって須恵器片が多量に含まれていた。この層は明らかに須恵器窯跡の灰原という感じを受ける。この層は、斜面の上方に向かって平坦面をすぎるところで消失していた。斜面には４０～５０cmの段があり、上層は後世の攪乱土となって窯跡の本体があったに違いないが、後世の攪乱（畑耕作）によって消失したものと思われる。第４層中（やや暗褐色土層）には、山陰地方の須恵器編年でいうところの第Ⅲ期の前半頃のものが最も古く、降って糸切底の段階（奈良後期～平安期）までの破片が包含されていた。したがって、推定される窯による須恵器生産もこの時期に含まれるものであり、住居跡らしきものも奈良時代の頃に須恵器生産に従事した人達の所産になるものであろう。

今回、本遺跡周辺を分布調査した結果、「焼山（やけやま）遺跡」という広範囲な遺物散布地を発見したことは、ここに一大集落のあったことをほのめかし、周辺の密な須恵器生産遺跡の分布状況を考えると、それは恐らく、須恵器生産に携わった集団の住まいであり、作業場であったと推定される。これまでは、大井の集落内とその南部の谷間（ババタケ窯跡、岩汐窯跡）、そして東部大海崎へ通ずる地区（山津窯跡、ジャバン窯跡）、大海崎地区（唐干窯跡、木ノ谷窯跡、古屋敷窯跡）の大きく見て４ケ所に窯跡の分布が認められた。今回の調査により、大井の北の峠を越えて本遺跡及びその周辺にも１つの群が新たに設定されるのである。このことは、須恵器に対する需要が古墳時代後期から律令体

制の時代に向けて急激に増大し、それを受けた大井地区では窯の個体数を増やしたものとみられ、本遺跡及びその周辺の生産関係遺跡の在り方は、その間の事情をよく物語るものであろう。

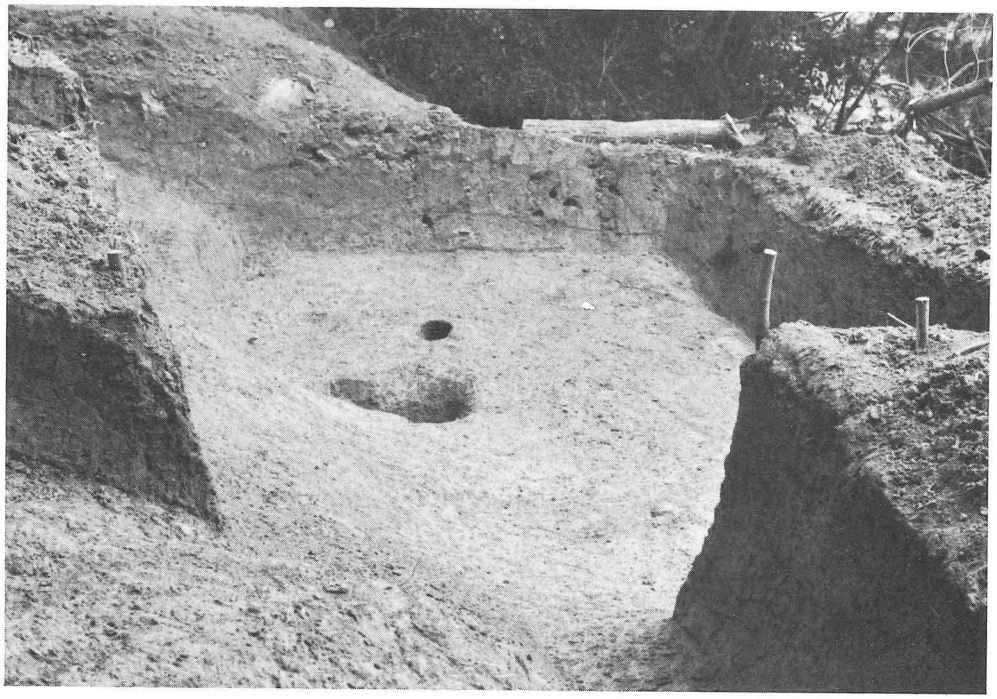
岩穴平遺跡　東からみる

焼山遺跡　西からみる

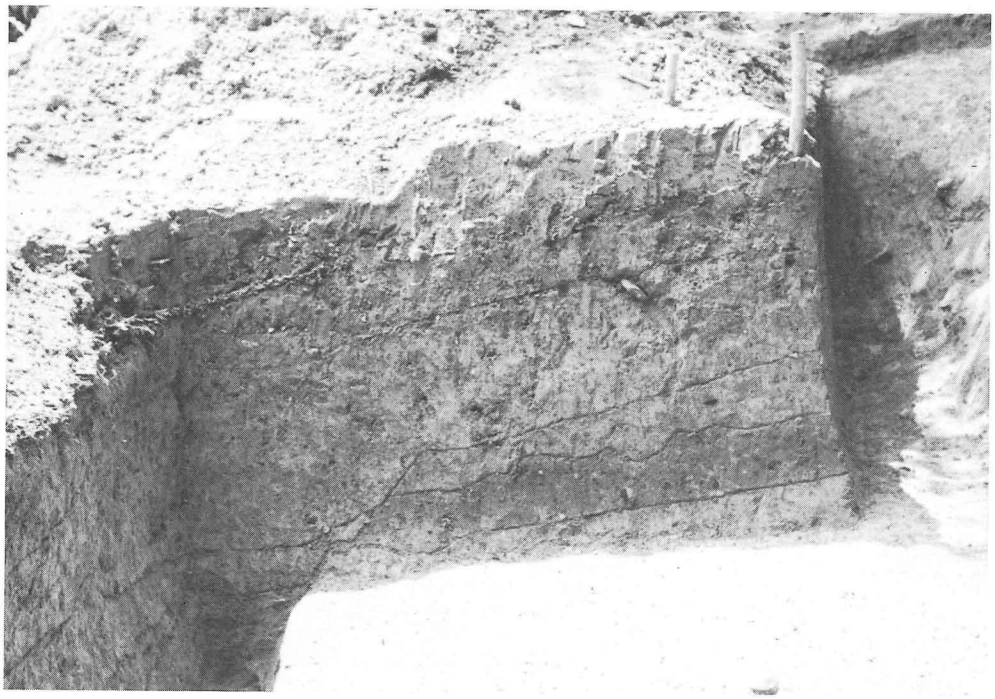


7 A区　住居跡推定地　柱穴

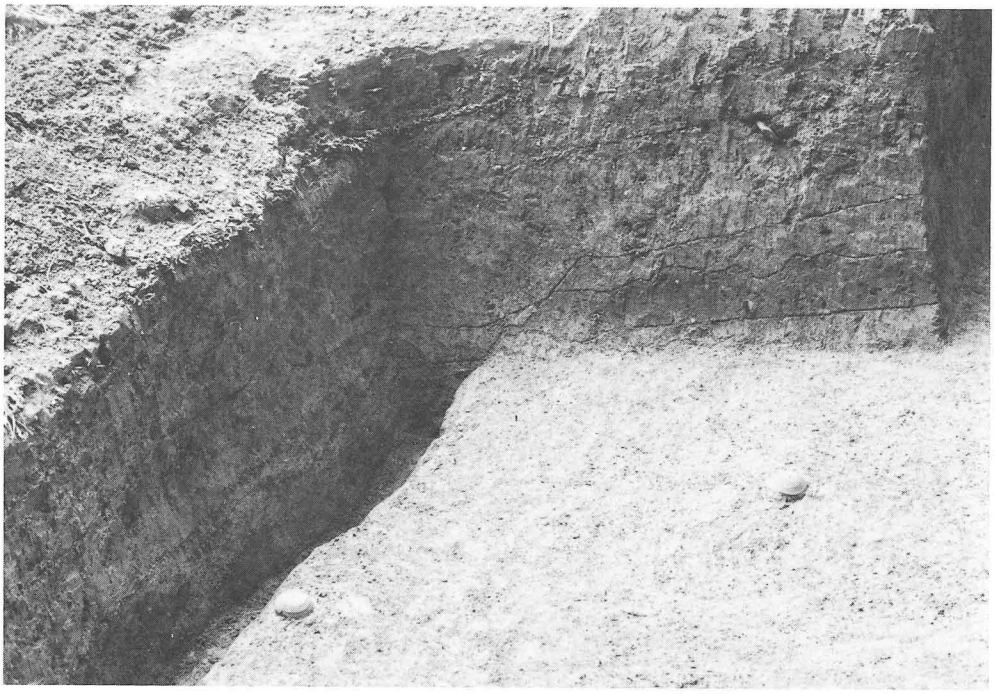
7区　地山直上　長頸壷底部出土状況



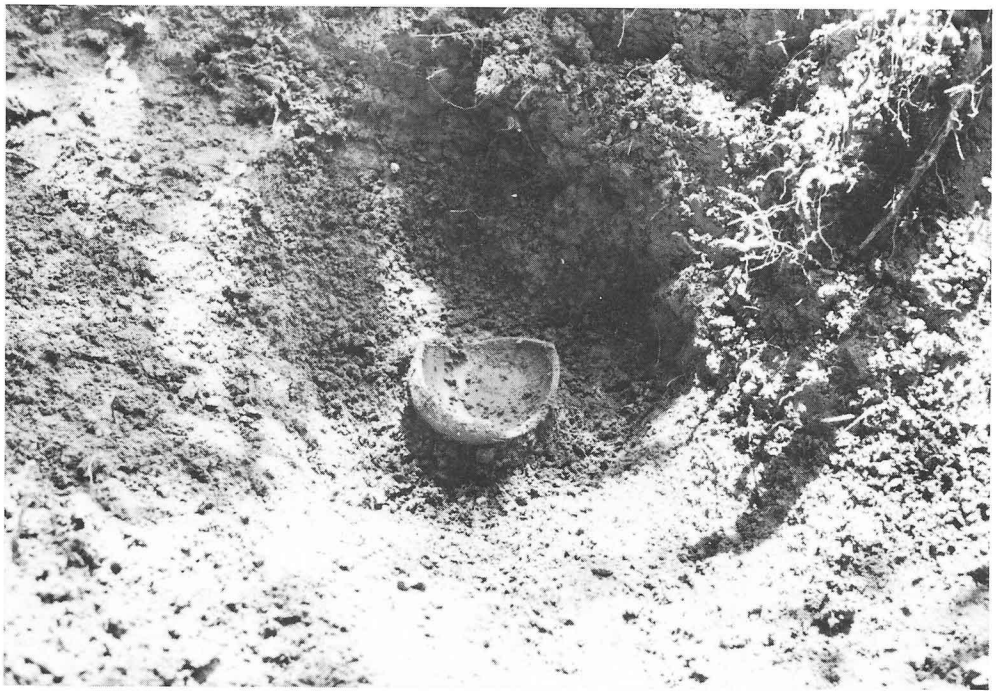
１３区　住居跡推定地　西から



１３区　西壁　堆積土の状況

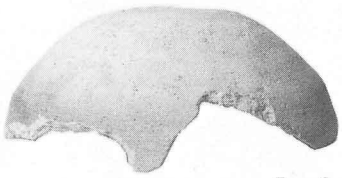


１３区　須恵器　出土状況

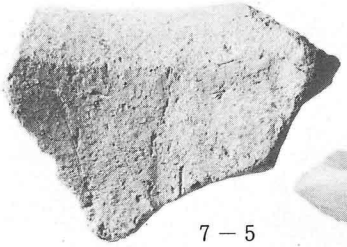


１６区　長頸壷　胴下半部出土状況

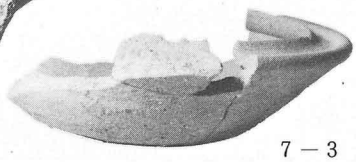
7－1



7－2

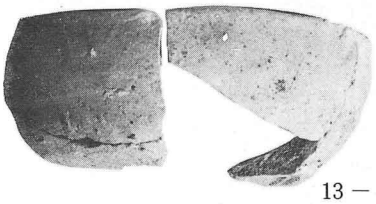


7－5

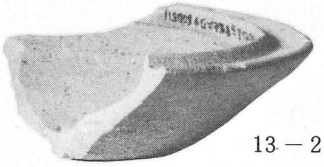


7－3

7区　出土遺物

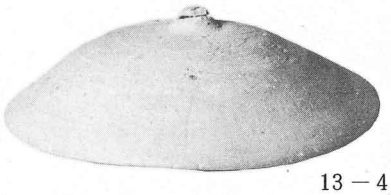


13－1



13－2

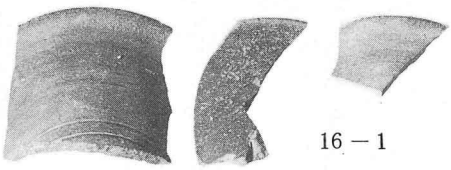
13－3



13－4

13区　出土遺物

16－2



16－1

16区　出土遺物

稲　葉　城　跡

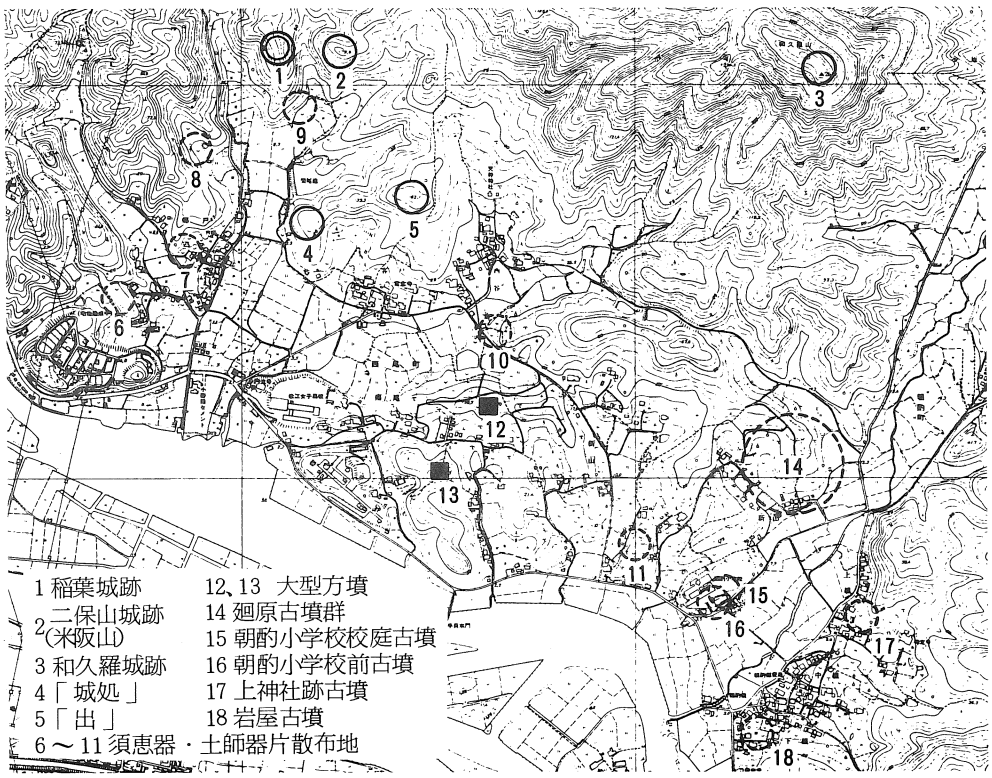
Ⅲ　稲葉城跡について

1.　遺跡周辺の歴史的環境

本遺跡は、松江市の市街地から東方へ約3.3㎞ほどのところにある郷戸（ごうど）や客戸と呼ばれる農業集落の北側背後山林尾根上に所在する。その地籍は松江市西尾町字稲葉1373番地である。ふもとの水田面からの比高はおよそ６０ｍで頂上部までは大変急峻な斜面となっている。

郷戸地区周辺の遺跡をみてみよう。低丘陵上にはあまり密に古墳は分布していない。他地域でみられるように一辺１０ｍ級の小規模の方墳は皆無である。その代わり、東方「新山（しん）」地区の現在茶園となっている低丘陵上に一辺３０ｍの方墳（第13図12）がある。又、その古墳の南方200ｍ隔てた山林尾根上に同じく一辺３０ｍを計る大型方墳（第13図13）が所在する。これら２つの大型古墳は、郷戸周辺の水田地を経済基盤としながらも、なおかつその南方に流下する大橋川の交通上、軍事上の利権をめぐって台頭した豪族の奥津城であったと思われる。

生活跡としては、遺物散布地が５か所確認（第13図６～10）されている。これらの考古学的事実から少



第１３図　稲葉城跡周辺の遺跡分布図

なくとも古墳時代からこの地域に人々が住みつき谷間水田や、大橋川に面した低地の農業開発を進めてきたに違いない。

時代は降って戦国期の様相をながめてみよう。稲葉城周辺の山にはいたるところに城跡がある。すなわち東方には標高 261.7 m の和久羅山があり頂上部には「和久羅城跡」（第13図3）注5がある。この城跡には、一の床、二の床、三の床が残存するといわれ、城主は尼子氏の家臣、原田五郎兵衛、同左衛門太夫の居城であったが、毛利氏との争いの結果、二転三転して結局毛利氏の手に帰することになった。稲葉城とこの和久羅山城との間には「米阪山」という山があり、「二保山城」と呼ばれた城跡があった。原田左衛門太夫義重の居住と伝えられている。

又、稲葉城の南側の溜池を隔てた低い山は「城処」と呼ばれ、ここにも出城跡がある（第13図4）注7といわれる。この「城処」の東側には「出」と呼ばれる山があり出城跡と考えられる。（第13図5）注8

これらの城跡は戦国期、尼子方についた土豪の居城として考えられ、毛利氏によって白鹿城・富田城が攻略された後は、毛利氏の占拠するところとなった。やがて関ケ原の戦いにより戦功のあった堀尾吉晴、忠晴父子が入国し、一国一城令がしかれるや新たに「松江城」を築城するに及びこれら戦国期の城跡群は全て廃絶したものと考えられる。

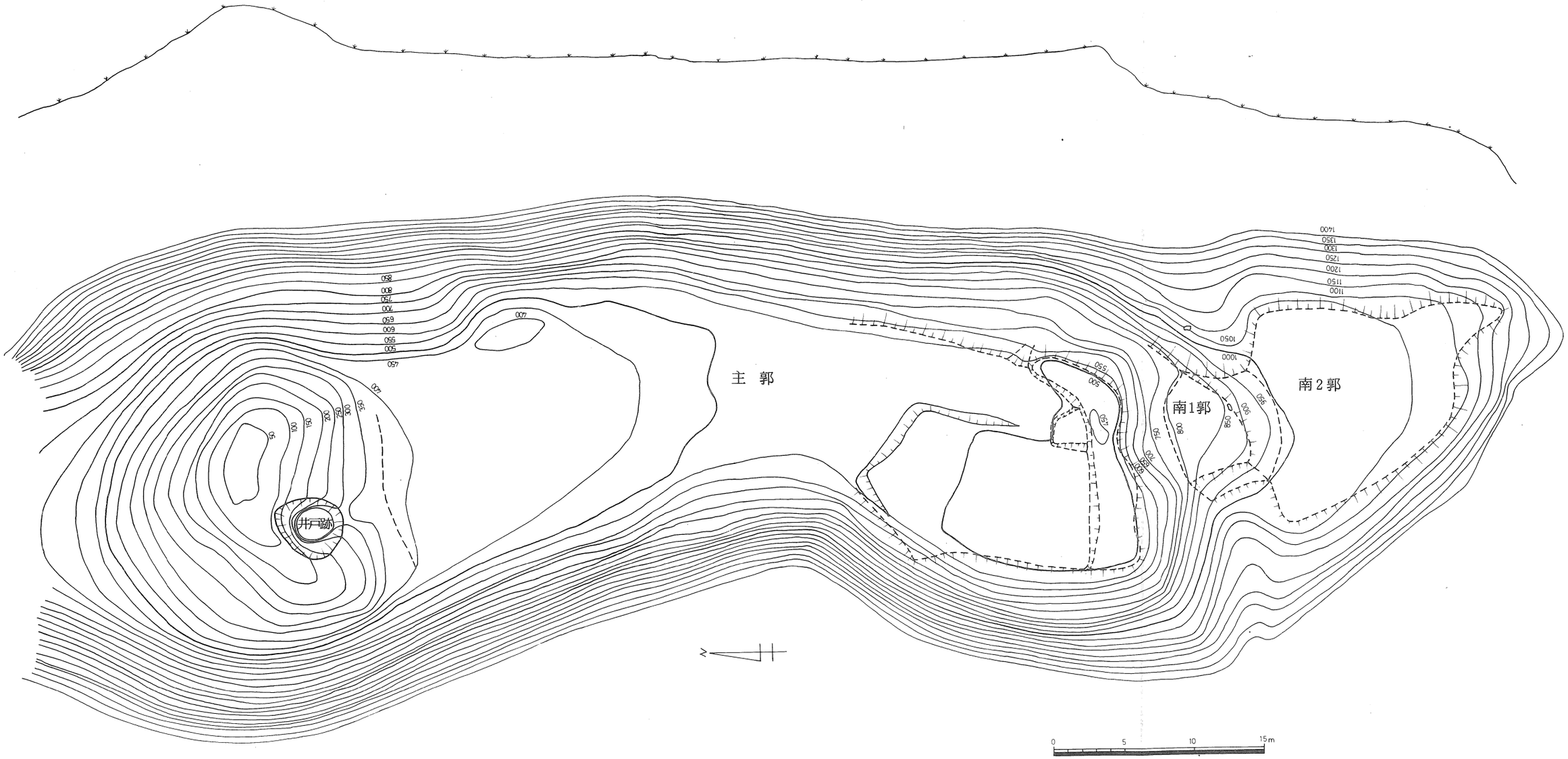
ところでこの稲葉城という名称は今回の調査で土地の字名をもってはじめて呼称したものであり、文献上では何ら登場してこない。地元の人は、この山を「観音山」と呼んでいる。それは、頂上付近に今でも献燈の残骸と祠の石組基壇が残っている。この小祠のある土地は明治の頃まで、ふもとの郷戸の部落３０戸の共有地で「祇園さん」と呼ぶ祠があって、年に１、２回山へ上がってお祭りをした後直会があったといわれる。

その後、この土地は他部落の人の所有に帰し、祠は郷戸の紐解神社に合祀され現在に至っている。注9

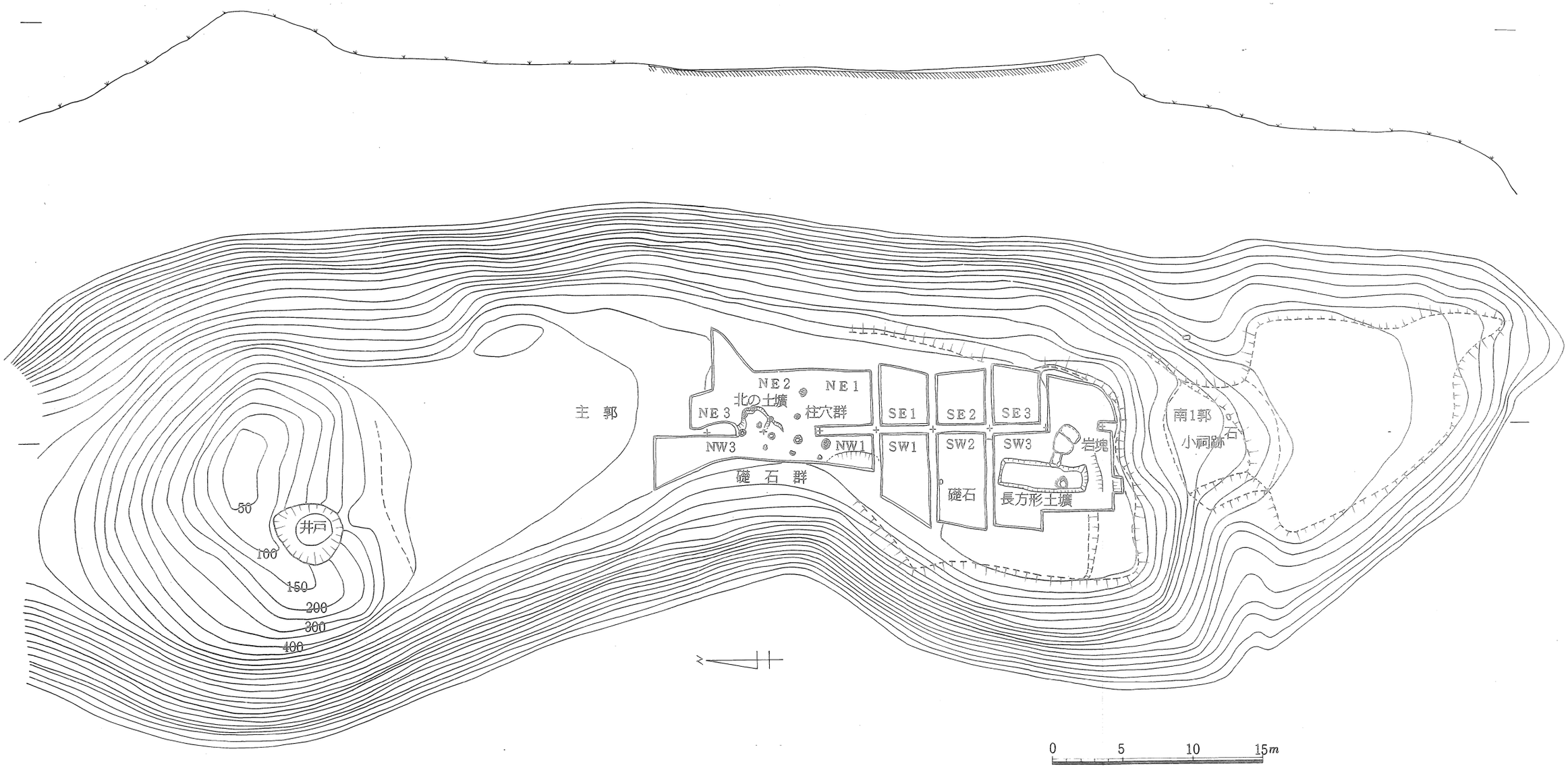
2. 調 査 の 方 法

鉄塔敷地は、尾根平担地の南半部に計画されていたので、南半部に４ m 四方のグリッドを計１６か所設定した。敷地中心杭を基点として東西南北にＮＥ１～４区、ＮＷ１～４区、ＳＥ１～４区、ＳＷ１～４区と呼称した。

各区の調査の結果、遺構としては土壙、柱穴群、礎石群、土塁が検出された。又、遺物としては、陶磁器、かわらけ、砥石、鉄釘が発見された。以下、各遺構及び遺物の概要を述べる。



第１４図　稲原城跡測量平面図



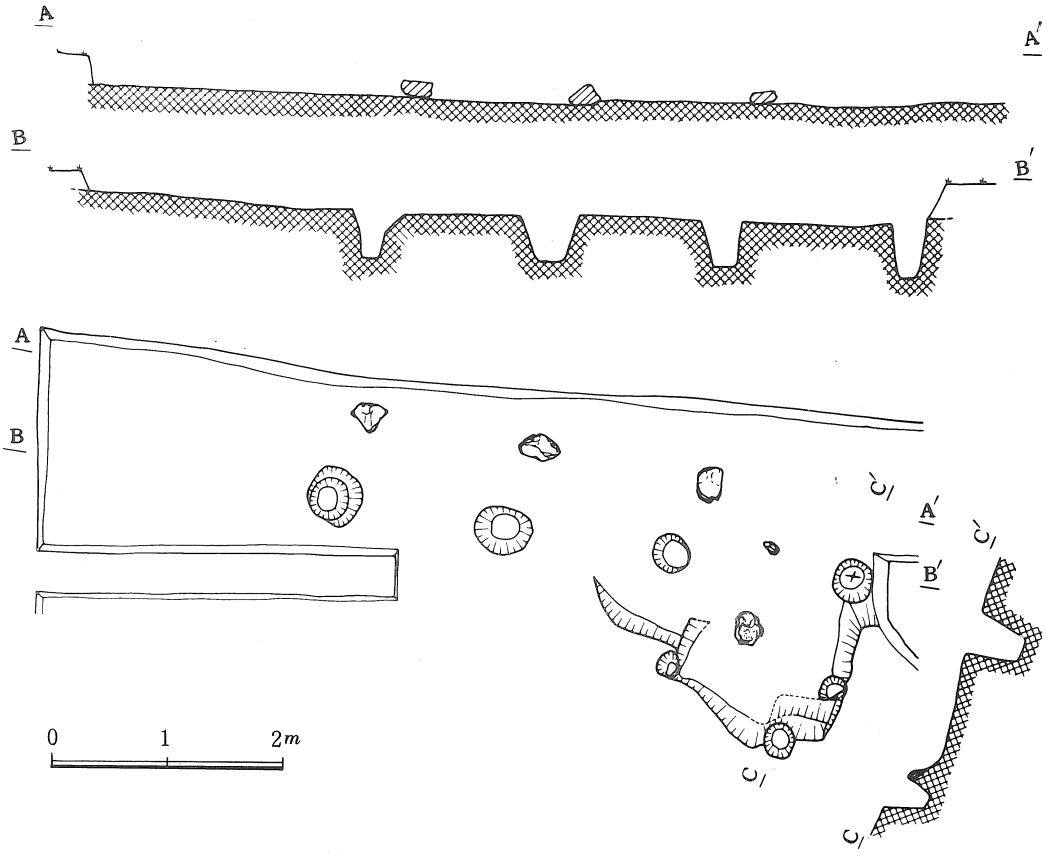
第15図　稲葉城跡調査平面図

3. 遺　　構

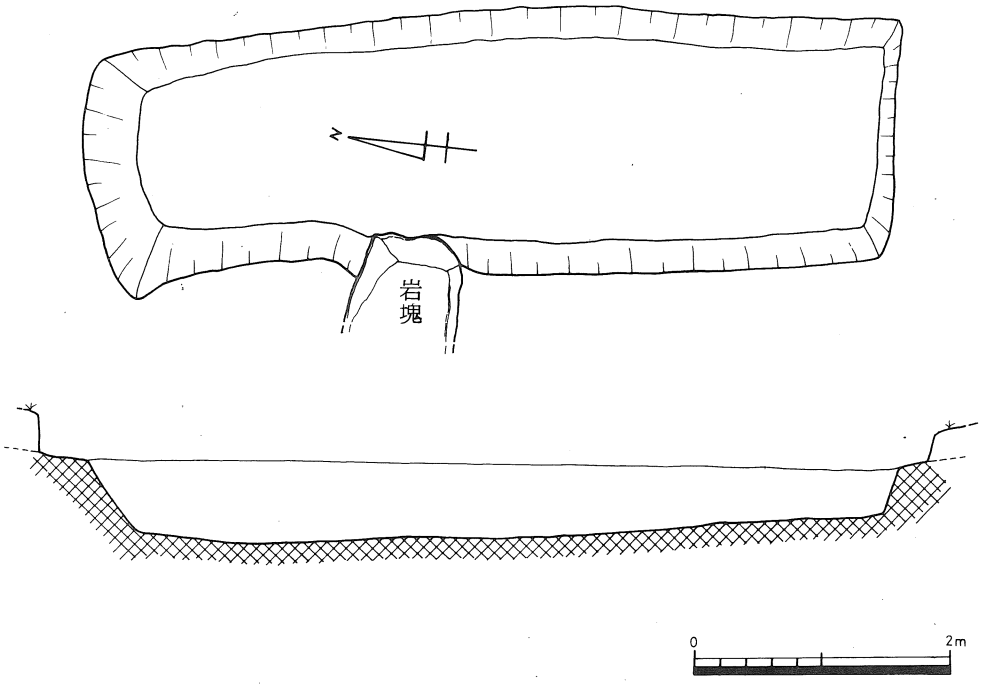
土　　壙

1）北の土壙　尾根平担部のほぼ中央部において南北2.2 *m*、東西1.5 *m*以上、深さは29 *cm*ほど掘り凹めている。西側は段はなくゆるやかに傾斜し平担面となっている。この段の斜面や上端部には計3個の柱穴と思われるピットが掘り込められ土壙を取り巻いている。ピットの上端径は30 *cm*～40 *cm*、深さは40 *cm*～55 *cm*を計る。土壙底面は平担で何ら遺構は見当たらなかった。遺物も全く発見されておらず土壙の成立年代は不明である。

出雲市半分城跡の調査では一辺1 *m*から2 *m*ほどの正方形、長方形、あるいは楕円形の土壙が合わせて6か所検出されているが、周囲にピットなどはなく、お互いに機能を異にするものと思われる。いずれにしても土壙の性格は不明である。ピットの内東側の一つは西壁を土壙の堆積土中に掘り込んでいるので土壙が古く、ピット群が後に掘られた可能性もある。



第16図　北の土壙実測図

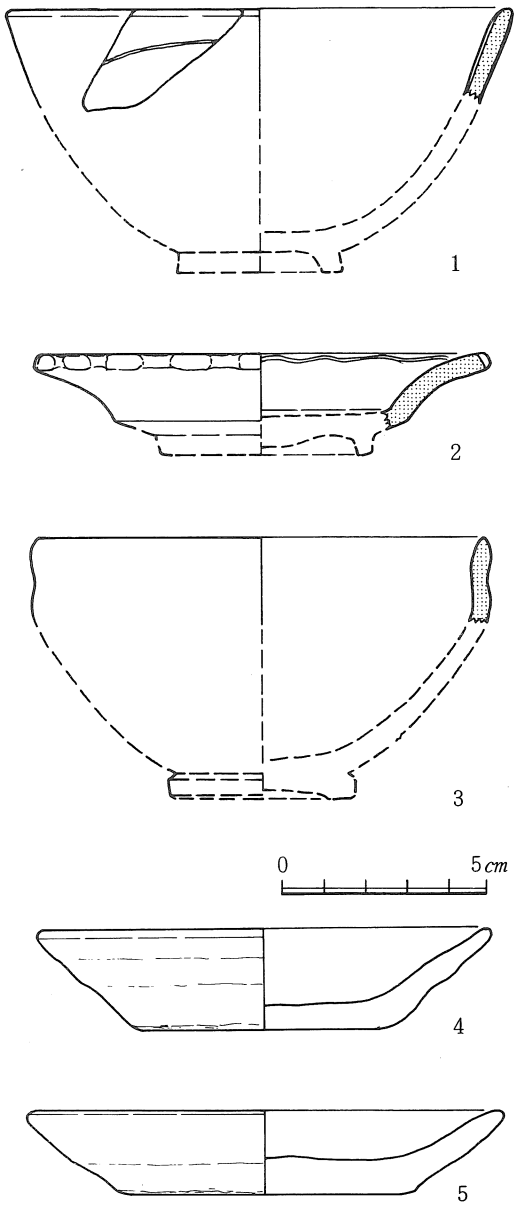


第１７図　南の土壙実測図

２）南の土壙　平担地の南端近くに検出された。長さ 6.37 *m*、幅 2.2 *m*、深さ６５ *cm*を計る大規模な長方形土壙である。土壙内表面にはさしわたし５０ *cm*前後の板石が３枚重ねられていた他は、赤ん坊の頭大からこぶし大の角礫がぎっしりと充満していた。その数は数千個にも及ぶものと思われるが、石質は全てこの山魂の岩盤を形成している粗面安山岩である。松江市国屋町所在の荒隈城跡の調査では一見して海石と思われる円礫を多数集積したところがあったが、恐らく投石用の石として山上へ運び上げられたものと思われる。

本城の土壙も荒隈城と同様の性格をもつもので、防戦用の投石を土壙内に多数集積していたものであろう。この礫の間から古式土師器片が採集されている。これは、古墳時代前期の複合口縁を有する壷の口縁部である。

柱穴群　北部平担地に計６個発見された。その内西側の４個は南北に一直線に並びその間隔は心々距離で２ *m*を計る。この柱穴群には直角方向のピットが皆無であるので建物跡とはにわかに断定し難い。むしろ柵列の可能性が十分ある。それぞれのピットの法量は上端径４２ *cm*～５６ *cm*、底径２２ *cm*～３１ *cm*、深さ５４ *cm*～５６ *cm*を計り、



第１８図　陶磁器・土師器実測図

比較的大きくて深いものである。

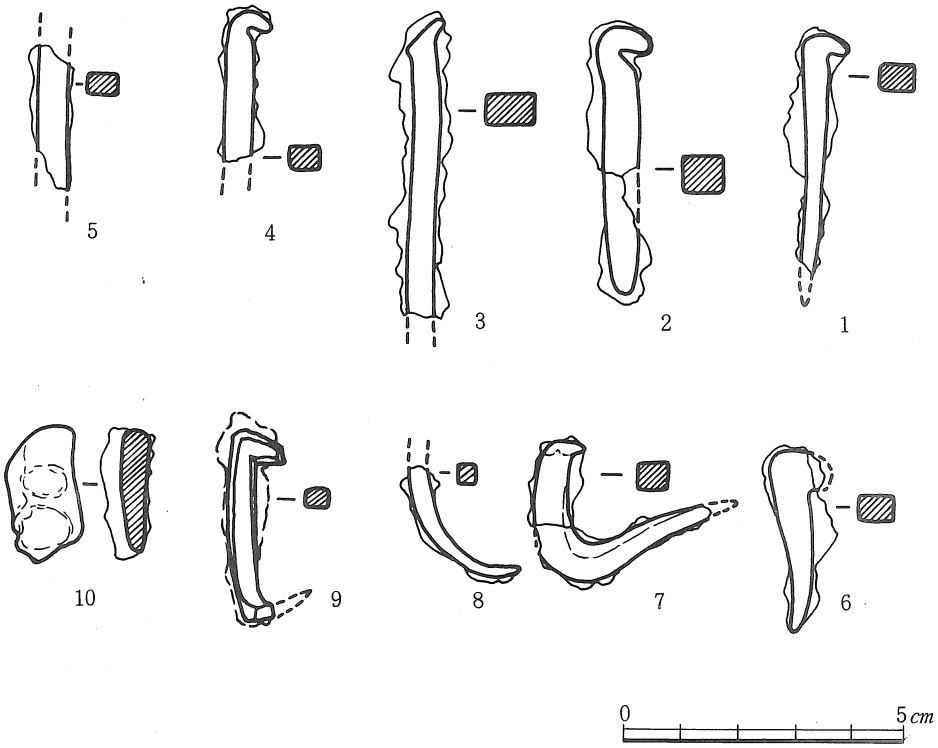
礎石群　平坦地西側の一直線に並んだ柱穴群のさらに西側に約８３～101 *cm*の間隔をおいて柱穴群とほぼ並行にかつ一直線に配列されている。計３個確認された。さしわたし３４*cm*～４６*cm*、厚み15 *cm*程度のもので石質はやはり粗面安山岩であるが、良質のものであるから少し離れた嵩山麓から運んできたものであろう。心々距離は２*m*であり、ＳＷ２区において延長線上に１個確認されている。最南端の礎石との心々距離は8.7 *m*で２の倍数とならないが、関連するものであろう。これら礎石群は柱穴群と同様直角方向の礎石が見当たらないが、後世取り払われた可能性もあり、一応建物的な施設があったものと考えてよいだろう。

土塁　平坦地の南部に所在する。南側では長さ11.5 *m*あり、東側に7.2 *m*延びている。高さは５０*cm*ほどあり、上端幅2.5 *m*で断面台形を呈する。盛土ではなく全て地山の岩盤を削り出している。出雲市半分城では大規模な土塁[注10]が検出されているが、むしろ松江市荒隈城跡最高所平坦地西南部に見られるように比較的小規模の土塁に属する。

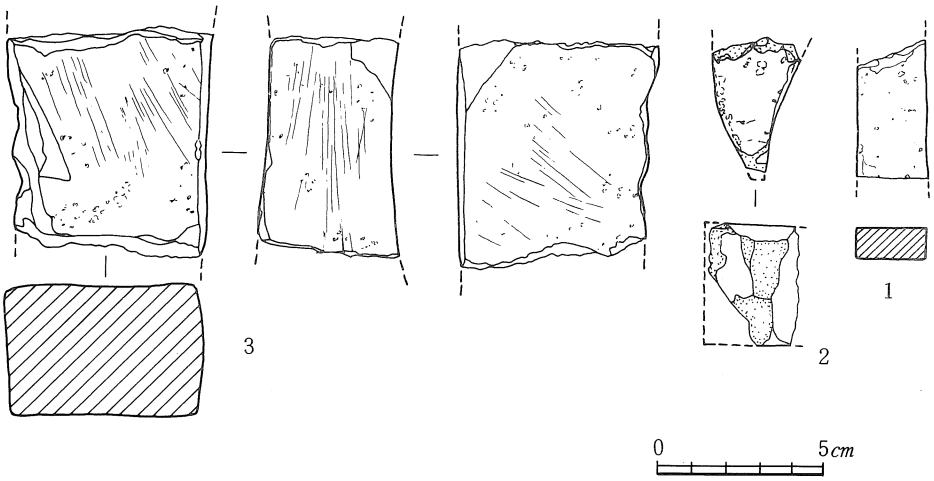
4.　遺　　物

〈陶磁器〉

青磁碗　口縁径12.3 *m*、推定器高およそ6.5 *cm*、器肉は口縁直下で５*mm*を計る。口縁部から胴上部にかけての小片である。0.5 *mm*の厚い青釉がかかる。口縁部直下外面に幅



第１９図　鉄製品実測図



第２０図　砥石実測図

1㎜弱の沈線がカーブしてえがかれている。ＮＷ４区の地山直上から出土。室町期に中国から輸入されたものであろう。（第１８図　１）

輪花青磁小皿　ＮＷ２区の地山直上から出土。口縁径11.0㎝、推定器高2.5㎝。暗緑色の釉がかかり細かい貫入がみられる。１５～１６世紀にかけて中国から輸入されたものであろう。（第１８図　２）なお、これと同種の口縁破片が山のふもとの道で発見されている。

天目茶碗　ＮＥ２区の地山直上から出土。破片は２片ある。口唇部は茶色で、以下は黒茶色で全体に鈍い光択をはなつが釉は全体に粗い。胎土はやや黄味を帯びた灰色で軟かい。釉の厚みは0.2㎜位。他の破片は胴部の小片である。口縁径10.9㎝、推定器高7㎝。（第１８図　３）

《土師器》

小　皿　所謂「かわらけ」の類に限られ、かなり多量の破片が出土している。その出土範囲はＮＷ１区からＮＥ３区までに集中していることが注目される。図にかかげたものはその内比較的大形の破片で実測可能なものである。いずれもＮＥ３区の表土直下から出土。４は、口縁径１１㎝、底径６㎝、器高2.5㎝を計る。器肉は、口縁部で3.5㎜、底部で6.5～8㎜ある。底部は糸切り痕跡がわずかに認められる。全体に粗雑なつくりである。（第１８図　４）　５は、口縁部11.4㎝、器高2.1㎝を計る器肉は口縁部で4.5㎜、、底部で９㎜ある。底部は糸切り痕跡がわずかに認められる。全体に粗雑なつくりである。（第１８図　５）　この種のかわらけは、他に口縁部の一部が黒く焼けた痕跡をもつものもあり、殆んどが灯明皿として使用されたと考えられる。

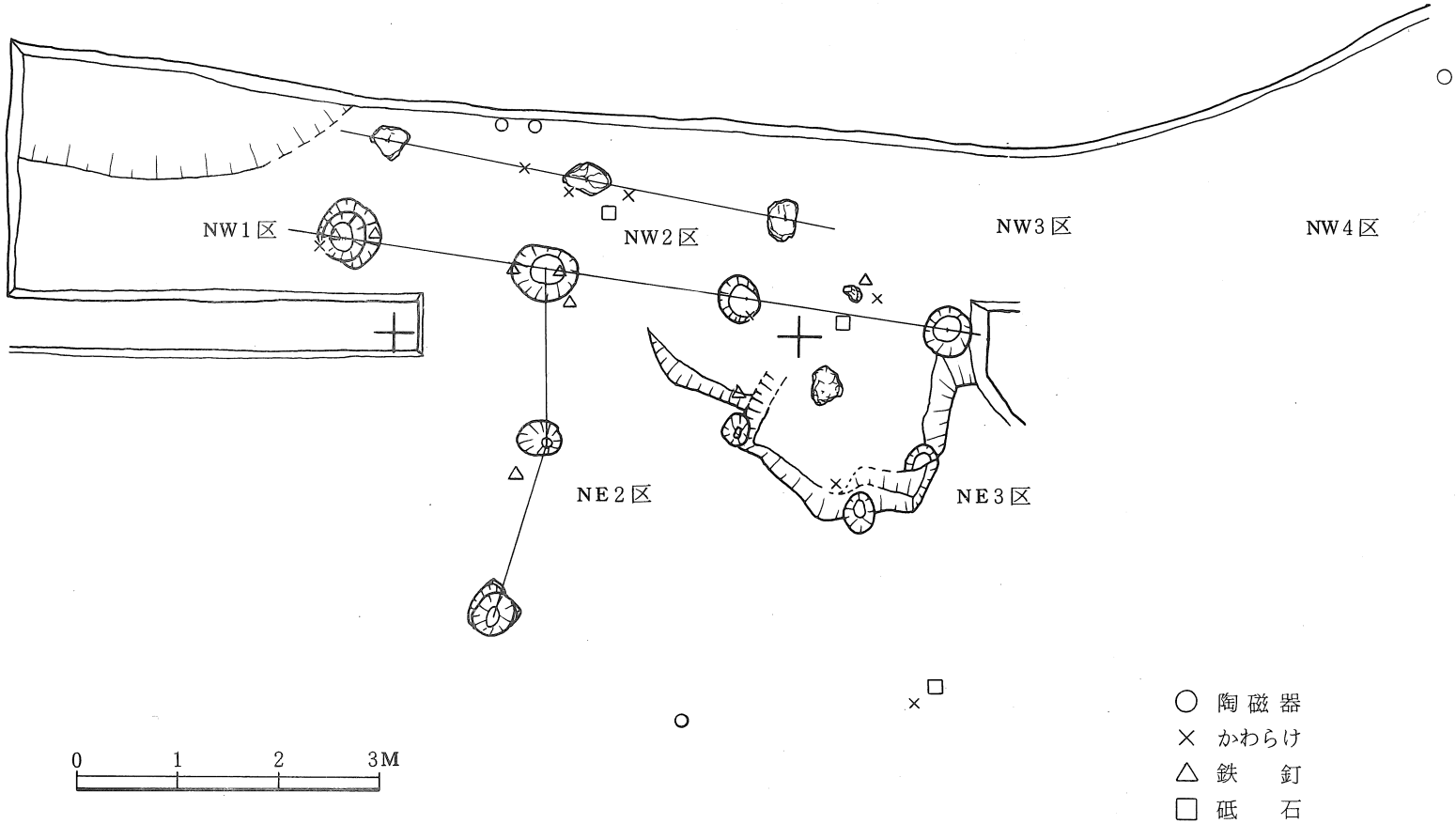
《鉄製品》

鉄　釘　計９本分出土した。出土範囲はＮＷ１区、ＮＷ２区、ＮＷ３区、ＮＥ３区、ＮＥ２区に限定され、しかもその内４本は、柱穴内から出土していることが注意される。頭部を直角方向に折り曲げた角釘で、長さは３～５㎝近くあり厚みは３㎜角のものから８×５㎜のものまで一定していないが、概して５㎜前後の長方形断面形を有するものが多い。（第１９図１～９）

他に鉄製品としては、厚み４㎜、平面形0.9×1.9㎝の楕円形を呈する用途不明のものがＮＷ２区の柱穴から出土している。（第１９図１０）

《石製品》

砥　石　計３点出土した。１は、小型のもので幅2.1㎝、厚み0.95㎝の断面長方形を呈する。現存長４㎝余りある。４面よく研磨され太い擦痕はない。石質は、灰白色の



第２１図　出土遺物と遺構の関係平面図

火成岩系統である。恐らく野外の携帯用の砥石であろう。（第２０図　１）　２も小型のもので、現存最大幅 3.7 *cm*、現存最大厚み 2 *cm*を計る。４面研磨されており一方の側に著しく外反しながら厚みを増している。ＮＷ２区の地山直上から出土。石英班岩系統のものである。（第２０図　２）　３は、断面 3.9 × 5.9 *cm*の長方形を呈する大型の砥石で広い面は、カーブして両側に厚みを増していく。３面が研磨された上に、鋭い擦痕を有する。ＮＥ３区の表土直下から出土。流紋岩系統の砥石である。（第２０図　３）

《古銭》　「寛永通宝」と「永楽通宝」が各一枚づつ出土した。

5.　小　　結

遺構の配置　本城は、すでに述べてきたとおり山の尾根を長さ８９ *m*、幅平均１５ *m* にわたって削平しそこに軍事的施設を配置したものである。この平坦面を仮に「主郭」と呼称するならば「主郭」の南には一段下がって「南一郭」がある。「南一郭」は長さ８ *m*、幅８ *m* の小範囲のものである。ここには先述したとおり祇園さんを祭っていた小さな祠がある。この「南一郭」のさらに南側には１ *m* ほど下がって「南二郭」がある。「南二郭」は長さ１３ *m*、幅１２ *m* の比較的広い平坦地である。この「南二郭」の南側は加工した跡はなく自然の急斜面となっている。このように当城跡は三段の郭をもち今回調査した「主郭」には北部に井戸跡、中央部に建物や棚列、土壙を、南部には長方形土壙と土塁を配置するものである。

第２２図　城跡位置図

そこで、いま少し今回の調査結果にもとづいて「主郭」の性格についで考察してみたい。

「主郭」の性格　まず、中央部の西寄りに検出された柱穴群と礎石群であるが礎石群の場合根石などなく地面に置いただけの簡単なこしらえでしかも現地表から浅い位置に検出されているので確認されなかった直角方向のものは後世取り払われた可能性が十分考えられる。礎石の心々距離は2 *m*で一定しており、最南端の礎石からさらに南へ8.7 *m*離れた延長線上にも1個遺存していた。これらのことから礎石を有する建物のあったことがほぼ推定出来る。

柱穴群の場合　直線上に等間隔で並ぶものの他にも平坦地中央部から西部にかけてもあるにはあるが直角方向にならないし等間距離の地点にはならないのである。したがって掘立柱の建物というより柵列があったと考えたほうがよさそうである。

この柱穴群と礎石群の時間的な前後関係であるが、これまでの調査結果から判断するならば礎石を伴なう建物跡の内側に柵列がくることになるので、これらは少なくとも同時には存在しなかったことがわかる。

次に北の土壙であるが、あるいは貯蔵穴のようなものであったかも知れない。南の土壙は、前述したとおり集石施設であろう。土塁は、防ぎょ施設である。「南二郭」もしくは「南一郭」まで敵が攻め上がってきた際に弓矢を伏射したり石を投げるために身を隠したところであろう。

このように考えてくると、「主郭」には2つの性格が考えられる。一つは、居住施設である。これは不定形土壙や礎石群に表われている。その二は、防ぎょ施設である。これは、長方形土壙や土塁、柵列にみられるとおりである。したがって全体としては、ひとつの独立した本城というよりは、出城又は砦（とりで）と見たほうがよいだろう。

当城跡付近の古道は2本ある。一つは、西側の道で、今の舗装道路の下の川に平行して走る道で1間幅位の狭い道である。

もう一つの道は、和久羅山のふもと朝酌町の西谷から米阪山を経由して南家へ抜ける道である。

当城跡は、この二つの古道に狭まれた位置にあり、交通上の要衝の地であるといえる。

思うに、戦国期の尼子氏配下の居城、所謂尼子十旗は広瀬の富田城を本城として出雲部の要所要所を固めていた。

その中でも第2番目に重要な拠点としていたのが松江市法吉町所在の白髪城である。白髪城は松田左近兵部の居城として市街地の北方、北山山脈の中の標高151 *m*の急峻な白髪山の頂上部に築かれた堅固な山城である。[注11]

広瀬の富田城と白髪城とは尼子氏の時代から常に密接不可分の関係にあり日頃から連絡を密にしていたことであろう。とりわけ、永禄5年（1562）毛利元就が、尼子平定のため出雲へ入国し、松江市国屋町所在の荒隈城を向城として築き、もっぱら白髪、富田両城攻略のためにゆさぶりをかけて以来[注12]、両城の連絡、戦闘支援のための兵員移動がひんぱんに行なわれたものとみられる。そこで両城の連絡ルートを考えてみた。一つは、駒返峠を越えて八雲村に出て津田か上乃木をとおり白潟へ出てカラカラ橋（今の松江大橋）を渡り法吉へ向かうコース。その二は、八雲村から馬潟か竹矢へ出て矢田の渡を渡って西尾付近から山越えして持田、川津方面へ抜けるコース。その三は、中の海を渡って本庄へ出て持田、川津を経由していくコースである。稲葉城は、この内第2のコースに沿った中間地点に位置する。南に大橋川、西に峠道を俯瞰することの出来る交通上の要地として、又、富田城と白髪城を結ぶ軍事上の重要な中継地点として本城は大きな役割りを担ったのであろう。そして恐らくは和久羅城や二保山城の出城もしくは砦としての機能を果たしていたものと思われる。

注1　島根大学考古学研究会「菅田考古第14号」
山本清「古墳の地域的特色とその交渉－山陰の石棺式石室を中心として－」（山陰文化研究紀要第5号　昭和39年12月所収）

注2　東森市良「朝酌の古墳文化」『研究紀要』第1号 松江市立女子高等学校 昭和45年
岡崎雄二郎「大井・大海崎の窯跡」（さんいん古代史の周辺＜下＞山陰中央新報社昭和55年8月所収）

注3　山本清「山陰の須恵器」（島根大学開学十周年記念論文集・昭和35年2月所収）

注4　松江市教育委員会「出雲国庁跡発掘調査概報」1970

注5　奥原福市編「八束郡誌　本篇　第三十四章　朝酌村の項」

注6　注5に同じ

注7　平田昌司「松江市内の古城跡」（山陰史談第5号　1972年8月所収）

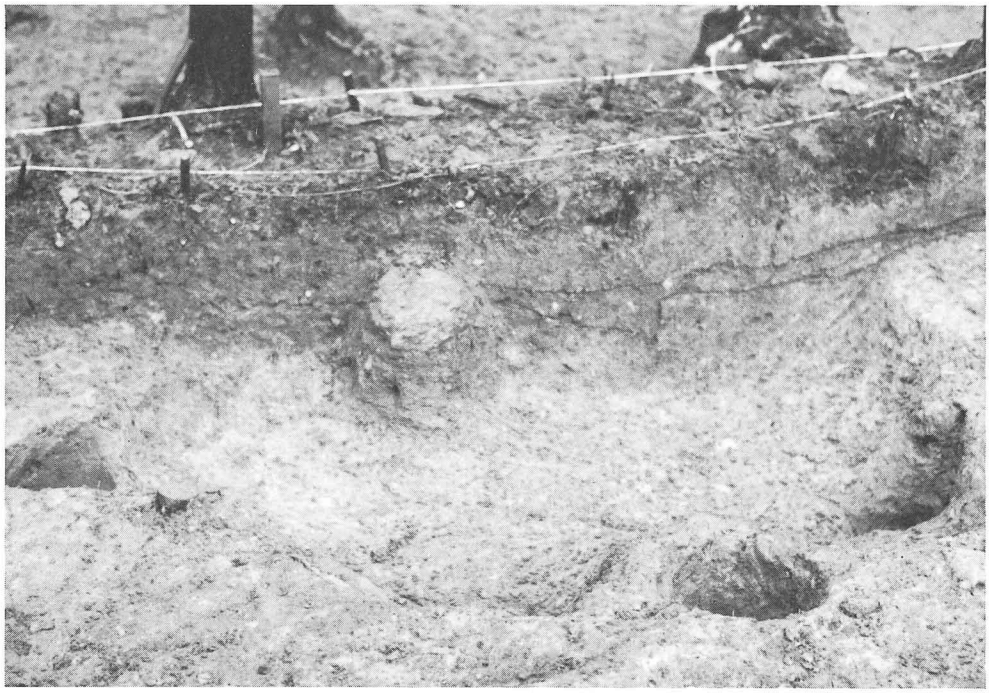
注8　注5に同じ。

注9　調査地点の土地所有者、原文重氏の御教示による。

注10　出雲市教育委員会「大井谷城跡・半分城跡発掘調査報告書」1979年3月

注11　新人物往来社「日本城郭大系14　鳥取・島根・山口」1980

注12　注11に同じ。



北の土壙　東からみる

米阪山　　和久羅城跡

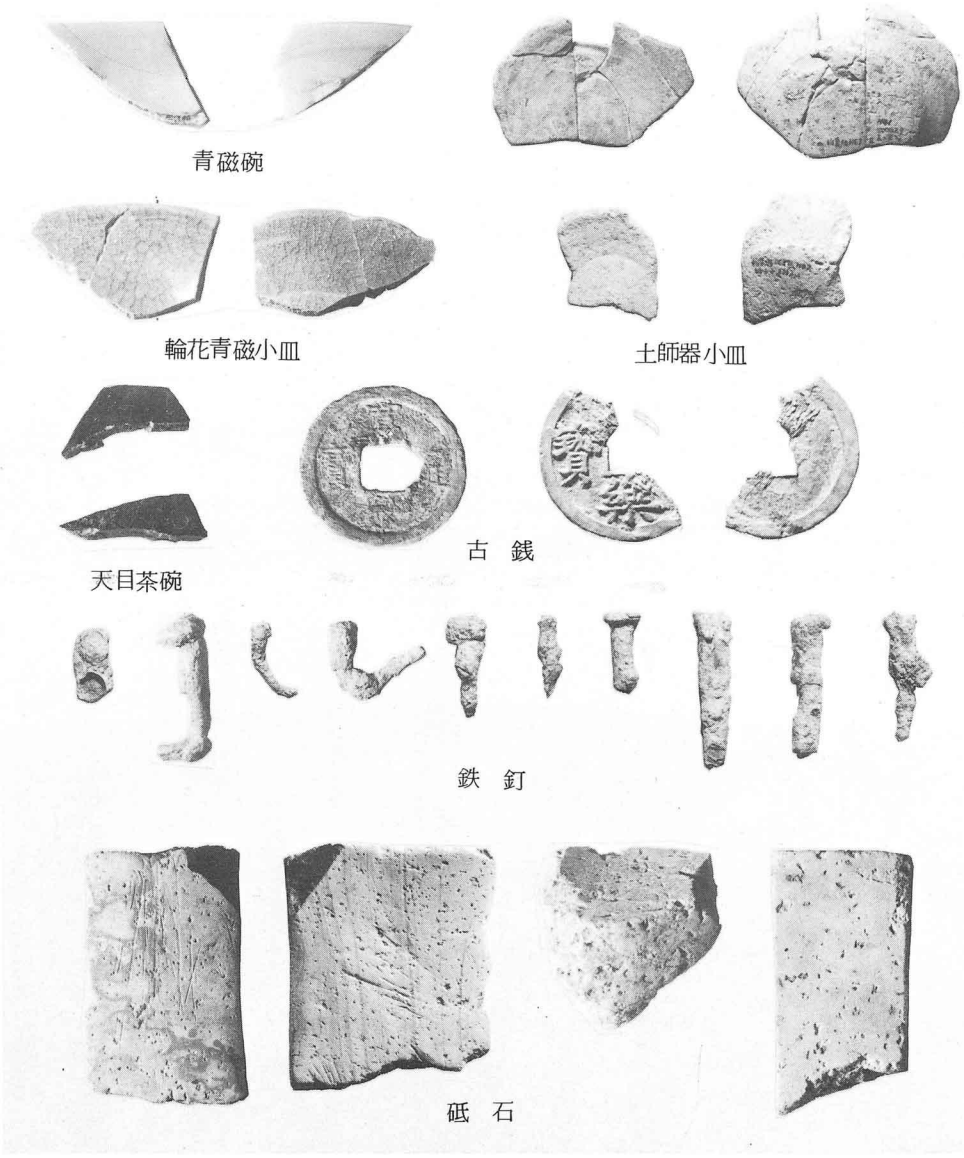
南の長方形土壙　北から

南の長方形土壙　上部

ＳＷ２区　礎石出土状況

礎石・柱穴群　南からみる

右上　礎石・柱穴　中央手前北の土壙



稲葉城跡出土遺物